

パネルディスカッション

テーマ 「住み続けたいまちづくり」～災害を経験したまちからのメッセージ～



コーディネーター 鳥取県知事 片山 善博

パネリスト

北海道虻田町長 長崎 良夫 氏

2000年3月有珠山噴火により、全町民の大半が他町村に避難するなか、避難者の対策などを指揮。被災住宅助成、失業者雇用対策、被災者への各種生活支援に奔走、公共施設（学校、公営住宅、道路、水道、下水道施設等の復旧）の生活関連施設の再建に努力している。また、噴火口が直下に観察できる散策路をいち早く整備、観光振興対策の将来像を見据えた目標とする、「有珠山噴火災害復興計画」を住民の参画のもとに策定し、町づくりを進めている。

神戸市高丸防災福祉コミュニティ会長 杉山 力子 氏

阪神淡路大震災時、避難所となった高丸小学校で、地域の人に呼びかけ2人1組となり、宿泊ボランティアを仮設住宅ができた4月中旬まで続けた。「自分の住む地域は自分たちの手で守る」を合言葉にイベントを通して地域を愛する心を育てる工夫をしている。例えば、防災訓練兼地区運動会や垂水の春の風物詩「いかなご」を主人公に一般公募で歌を作り、振り付けもして楽しく踊っている。「いかなごGO!GO!」はCD化して、普及に努めている。

日南町長 矢田 治美 氏

西部地震発生後の住宅復興補助、防災拠点としての公共施設の整備等住民の立場に立った施策を展開し、住民生活に密着した被害の復旧を最重点に進めている。各自治会を単位とした自主防災組織の再構築を行い、住民相互の連絡網を整備し、地域は地域住民の手で守る体制づくりを図っている。また、元気が出る日南町を目指して「にちなん住民参画まちづくり事業」により人材育成を進めている。

日野ボランティアネットワーク 山下 弘彦 氏

鳥取県西部地震発生後の日野町で、初めて災害ボランティアを経験。住民から要請があった災害復興活動を行ったほか、災害ボランティアセンターで「聞き取りニーズ調査」を企画し、運営を手伝った。昨年10月から朝日新聞に「ボランティア奮闘記」として日野町での災害ボランティアの活動を連載しつつ、ボランティア活動を続けている。日野ボランティアネットワークには結成から関わった。

(コメンテーター)

神戸大学都市安全研究センター 教授 室崎 益輝 氏

阪神淡路大震災後、被災者復興支援会議座長、神戸まちづくり研究所理事長、海外災害援助市民センター副代表として、被災者の支援や復興まちづくりに取り組む。と同時に、消防庁の防災まちづくり大賞の選考委員、国土交通省の防災まちづくり委員会の委員として、わが国の防災まちづくりの推進に努めている。

○司会

本日の県民大会のメインテーマである「住み続けたいまちづくり」に基づいて、パネルディスカッションを開催したいと思います。

「災害を経験したまちからのメッセージ」という副題に沿って、全国各地において災害に見舞われた体験を活かしながら、特色あるまちづくりに取り組んでおられる方々に出演していただき、その事例を紹介していただきながら議論を深めていただきたいと思います。

なお、御来場の皆様からの御意見等につきましても、お伺いする時間を設けておりますので、後ほどよろしく願いいたします。

では、パネリストの皆様を御紹介申し上げます。

まず、北海道の有珠山噴火による被災地から、虻田町長の長崎良夫様。(拍手)

長崎様は、21世紀の火山観光都市を目指してというテーマを掲げ、噴火口周遊コースの整備など、火山と共生するまちづくりに取り組んでいらっしゃいます。

続きまして、阪神淡路大震災の被災地から、神戸市高丸防災福祉コミュニティ会長の杉山力子様です。(拍手)

杉山様は、普段から交流がいざというときに力になるとして、運動会などイベントを通じたユニークなコミュニティづくりに取り組んでおられます。

続きまして、地元、西部地震の被災地で、行政の立場から、日南町長の矢田治美様。(拍手)

矢田様は、高齢化や西部地震による集落の衰えを防ぐため、にちなん住民参画まちづくり事業を展開し、元気なまちづくりに取り組んでおられます。

続きまして、同じく地元、西部地震の被災地から、日野ボランティアネットワーク

の山下弘彦様。(拍手)

山下様は、この西部地震を契機に育ったボランティア精神を町に根づかせるとともに、高齢世帯や仮設住宅世帯に対するニーズ調査を行うなど、住みよいまちづくりに取り組んでいらっしゃいます。

そして、先ほど基調講演で大変貴重なお話をいただきました、神戸大学都市安全研究センター教授の室崎益輝様。(拍手)

室崎先生には、専門的な立場からいろいろなコメントや助言をいただきたいと思っております。

なお、本日のコーディネーターは、鳥取県の片山知事が務めます。(拍手)

それでは、片山知事、よろしく願いいたします。

○片山知事



それでは、これからパネルディスカッションに入りたいと思っております。

今、司会の方から、それぞれパネリストの皆さんを御紹介いただきましたが、それぞれの方が地震とか火山とか、そういう被害を受けた町に住んでおられて、復興に苦労された、いわば被害者の仲間であります。その被災の体験を踏まえて、これから新しいまちづくりをしよう、それに取り組んでおられる方です。きょうは、こういう皆さん方の体験、現在なさっておられること、今何を考えて、何が課題であるか、そんなことを率直に話していただいて、それをこれからの我々の地域づくり、まちづくりに活かしていきたい、一緒に考えていきたいという趣旨であります。

最初に、それぞれパネリストの皆さん方に、みずからの被災体験でありますとか、

その被災をしたとき、どういう活動をされたか、そんなことをお話をいただきたいと思ひます。その上で、先ほど御講演いただきました室崎先生には、専門的な立場から助言、コメントをいただければと思ひます。

最初に、北海道からはるばる来ていただきました、虻田町の長崎町長さんにお話をいただきたいと思ひうんですが、皆さん方御承知の洞爺湖温泉というのがこの虻田町にあるわけであります。大変多くの観光客を集めておられたし、これからも集めなさいけない、そういう町であります。私ごとになりますけれども、私、今から27年前の昭和50年に結婚しまして、新婚旅行、北海道行って、洞爺湖温泉に泊めていただいたんですけども、たまたまきょうの9月28日といったら私の結婚記念日でありまして、大変……（拍手）ありがとうございます。そういう日に虻田町の町長さん来ていただいたというのは、大変個人的にも感慨深いものがあります。そういう長崎町長さんから、口火を切っていただきたいと思ひます。

○長崎氏



どうも、鳥取県の皆さん、私どもの町もちょうど鳥取県の西部地震の少し前に、同じ年の3月31日に有珠山の噴火がございました。地震災害と違ひまして、噴火災害というのはまた異なつた災害でございますけれども、それらの概要などをちょっと簡単に説明させていただきたいなと、こんなふうにお思ひしております。

私どもの町、大変狭い町でございます。北海道は大体、町村というのは相当広い面積なわけですがけれども、今ちょっと画面

に出ておりますけれども、これは当時の噴火の状況でございます。大変広がつた噴火になっておりますけれども、噴火口が1カ所ではなくて、数十カ所できておりました。幾つぐらいの数ができるのか、いまだにわからないくらい噴火口ができた、その様子でございます。

噴火災害にしろ地震災害にしろ、あるいは水害にしろ、災害についてやはり一番大切なことは、住民の方をいかに早く、いかに的確に避難させること、これに尽きると、このように思ひうわけでございます。私どもの有珠山は、大体20年から30年周期で噴火する山と、こんなふうにお言ひされているわけでございます。それとともに、噴火する前には、火山性の地震、これは本当に縦にズドンとくる地震でございます、この地震が来ると大体噴火が近いなと、こういう予測をするわけでございます。今回も、噴火する4日前からそういう地震が頻発していたということで、近く噴火があるんだなと、こういう予測は全町民持つてたわけでございます。しかし、噴火はするんだということはわかるんですが、いつどこで噴火をするかという、これは今のところわからないわけでございますし、また、私どもの今回の噴火で、大変北大の教授の岡田先生という方が有珠山を長らく研究しておりましたので、大変その先生の研究結果というのが、私どものこのたびの噴火災害には役立ったわけでございます。

私どもも、そういう地震が起きたと同時に、やはりいつ避難させるかというのが一番の問題でございます。それと、噴火だから頂上での噴火であろうというようなことで、頂上から近い地区の方々、住民を避難させておりました。これは29日の日に避難をさせたわけでございます。その避難をさせたときから3日後に噴火が起きたわけでございますが、この噴火が全く予想も

していない、頂上での噴火じゃなくて山裾の、全くこれは有珠山と関係がないんじゃないかと思われるそこから噴火をしたということです。そしてまた、危険な区域の方々を一番安全と思われました海岸の方の役場所在地の方の公共施設に避難をさせていたわけですが、いざ噴火したところが、この役場所在地からすぐのところまで噴火をしたわけでございます。そういうことで、結果的には、避難をしていた危険区域と思われた地区の方々も避難させると同時に、また、受け入れていた人たちも避難をさせなければならぬということで、結果的には、全町民の96%という人たち、大体1万ちょっとの人口でございますが、こういった人たちを避難させざるを得なかったということでございます。

そして、このスライドでもおわかりかと思いますが、上の方が洞爺湖でございます。下が太平洋でございます。湾になっている、噴火湾、あるいは内浦湾と称しているところでございます。この海と湖の間が大体5キロ程度のところでございます。その中間に有珠山があるわけで、そこが噴火したわけですね。その噴火したことで、事もあろうに、一番重要な国道230号線、これが、ここに国道が走っているわけでございます。これは洞爺湖を経由して札幌に走っている国道でございますが、これのちょうど中間地区で噴火をしているわけですね。ここで噴火をしたわけでございます。ですから、本来危険だと思われた洞爺湖温泉街の人たちは、虻田町のこちらの本庁の方に避難をさせていたわけですが、ここで噴火したということで、急遽、こちらの住民と同時に温泉町から避難をさせた人たちをこちらの方の隣町に避難をさせざるを得なかった。こちらの室蘭市の方に行くわけで、大きな都市があるわけですが、有珠山がこの辺にございますので、

裾野が海岸に広がっているということで、この国道37号線1本きりしかない、あるいは高速道路がここを走っている。これらがすべて閉鎖されているということで、山から遠ざかった西側の方に避難をさせざるを得なかったという結果で、隣町、そして普段あんまりつき合いのない長万部町というところまで避難をさせる。結果的には、9,000人からの人たちを避難させざるを得なかった。そして、避難所総数も31カ所になったということでございます。

その避難も、結局一過性の災害でないというのが噴火の特色でございますから、そのために長期的な避難、大体一番長い人で5カ月の避難を余儀なくされたということでございます。これらの方々もほとんど虻田から遠いところに避難をしていたということで、大変いろいろな面で御不便もおかけしたんじゃないかなと、こんなふうにも思っているわけでございます。

それと同時に、噴火と同時に、私ども一番恐れているのは泥流災害なわけですが、この最初の噴火口の後に、この辺一帯がすべて噴火口になってしまったんですよ。5日間ぐらいの間に。そして、4日目に、この付近から泥流が発生して、洞爺湖市街地の方に泥流が走ったという。たまたまこの泥流は避難しているときに発生したということで、結果的には1名の犠牲者も出さず、無事災害を終えたということでございます。

先日まで、この7月まで、仮設住宅に入居していた方々も相当おったわけですが、結局、この泥流が走ったところ、ここには公営住宅だとか一般住宅202世帯、あるいは学校、町営の温泉、保育所、図書館、こんなような公共施設が密集していたところがございますが、これらはすべて使い物にならなくなってしましまして、ここを現在新たな砂防施設として復旧工事をや

ろうというようなことで、今作業を進めているわけでございます。

そんなことで、このたびの災害については、長い期間であったために、大変多くの方々、全国からの方々、大変な支援をいただいたということで、特にボランティアの方々、この活動というものは本当に私どもも頭の下がる思いであったなと、こんなふうに思っているところでございます。

とりあえず状況等について御説明申し上げておきたいと思えます。以上でございます。

○片山知事 ありがとうございます。

それでは、杉山さんに、続いてお願いしたいと思います。

○杉山氏



失礼いたします。

私は、神戸市の垂水区、神戸市の西の端です。お隣は明石市、それから目の前には明石海峡大橋がすごくきれいな姿を横たえております。その垂水区なんですけれども、震源地が淡路島という割にしては、垂水区、西区、北区という3カ所は、割合被害が少なかったんです。というのは、長田区、兵庫区、東灘、灘といったところが余りにもすごい被害、後になればなるほどすごい被害だった。それから比べれば、垂水区は震度6強、だからこの辺の鳥取県西部地震とほぼ同じくらいの強さだったと思えます。

全壊した建物というのは少なかったんですけれども、家の中はもうめっちゃめっちゃです。靴か何か履かなければ歩けないような状態。そんなときに、5時45分でしたからね、もう6時過ぎに近所の人が来て、福

祉センターあけてもいいか。私、福祉センターも管理してるもんですから、この地域福祉センターというのは、神戸市は小学校区に1軒ずつあるわけなんですよ。そこをあけてくれと。7時前に行ったら、もうびっくり。毛布かぶった人がいっぱい。すぐ鍵あけて入っていただいたんですけれども、そんなにこの辺ひどいんだろうかと。全壊のところもないのに。それで、後で聞けば、小学校がうちは23あるんです、垂水区に。中学校が6校、高校が3校。それから、福祉センターが18戸、そのころ建てたんです。それ全部合わせて50カ所ほどある公の建物に、全部避難者が押し寄せていて、1軒に200名近くは入ったということで、本当に驚きました。

私は、たまたま区役所に近いものですから、電話が通じないのですぐ区役所へ行って、どんなふうにしたらいいか指示を仰ぎました。そしたら、まず食べ物がないと。朝9時でしたけれども、とにかくおにぎりか何かつくってくれということで、お米もないからみんなから集めて。ところが、あのときの垂水区の商店、皆閉めちゃってるんです、戸を。後で何でこんなことしたんだろうと思ったんだけど。私たちが米を持ち寄ってたんですが、ガスもとまりました。電気は幸い来てたんです。水も来てました。電話は通じなかったんだけど後で通じたということで、福祉センターには水と電気が来てました。それでお米を持ち寄って、電気釜持ち寄って、それで早速おにぎりつくって、うちの福祉センターにいる人、約70名。それから、区役所へ500個欲しいということで、40キロのお米を持ち寄って、それでとにかくおにぎりつくって、もう夕方までかかって運び通しました。

そうこうしているうちに2日目も済んで、3日目になって、小学校に避難者があふれてるという状態を聞いて学校へ行きま

したら、先生がもう授業の準備するところじゃないと、その避難者の対応に追われて、不慣れなことをやってるということで。それじゃあ私が何とかしましょうということ、小学校区の人に呼びかけて、2人一組で、50人、だから25組ほどつくりました。とにかく一晩だけでもいいから泊まってちょうだいということで、一晩が二晩になったんですけれども。すごい冷え込みなんです、1月の20日前後ですから。あの冷え込み、何の暖房もないところで、日赤からもらった毛布1枚にくるまりながら皆さんと震えてたんですけれども、2日目、3日目になったら、みんな家へ帰るんですね。帰って、マットとか布団とか持ってきて、避難者の方は学校を根城にして、時々お家へ帰る。

なぜ学校にいるか。お弁当が出るようになったんです。2日目から救援物資がいっぱい届きました。いろいろなものが届いたんです、カチンコチンの餅とかラーメンとか、すぐには食べられないものでしたけれども。それから、今も覚えてる。八千代町と書いたところからおにぎりがどっさり届いて、そういうのを仕分けする役目を私たちがやりました。

一番うれしかったのは、勤めに行きたくても行けない、交通が遮断されて行けない、勤めてる会社が避難で行けないという人、若い人たちが宿泊ボランティアに参加してくれたこと。だから、こういう地域の人々が力を合わせてくれたということが、とてもそのときうれしかったんです。平和になるに従って、若い人たちも仕事の方が忙しくなって、また高齢者で地域づくりをしてるといような今現状ですけども、それでも何かあったら手伝ってくれるということで、大変うれしい思いをしました。

それから、震災済んでから神戸市がいろいろな救援物資といいますが、震災のときこ

れがあったらよかったというジャッキ。皆素手で埋まった人を掘り起こしたりしたもんですから、小さなジャッキで大きなものをどンドンどンドン動かしてくれるジャッキ。それから組み立て担架、それから一輪車、荷物を運ぶ、そういうものがどンドン届き始めました。次は、それを使って、私はみんなに、訓練と言ったらもう構えてしまうんですね。だから、訓練じゃなくて楽しいイベントの中にこれを取り入れようということで、地域でやっていた運動会の中のゲームにこれを取り入れました。一輪荷車に荷物積んで走る。ただそれだけじゃなく、ヘルメットをかぶらなきゃいけない、軍手もはめる。それがリレー。ヘルメットと軍手をバトンがわりにして。そのヘルメットもかぶってみてわかるんです。何もしないでかぶってたらいいんですけれども、走っていくとなったらしっかり締めないと、とんとんとんとんと前へ来て、目の前が見えなくなって、結局おくれてしまう。だから、ヘルメットというものをしっかり自分の頭に合わせて締めなきゃいけないというのも、ゲームの中で教わった。それから、どのくらいこんな小さなジャッキで持ち上がるんだろうと、学校にある朝礼台の下に入れて、朝礼台に10人ほど乗ってもらって、四隅に置いて上げてみたら上がるんですね。そんなことを遊びの中から体験して、どんなにこの器具が大事か、使いこなすということがどんなに大事かというようなことを現在やっております。

よろしいでしょうかね。

○片山知事 ありがとうございます。

それじゃあ、矢田町長さん、お願いします。



○矢田氏

日南町でございます。県境に接しております町でございますけれども、今回、県境サミットという協議会をつくっておるんですが、この圏域が西伯町、あるいは日野町が大きな被害にあったわけでございますけれども、島根県では伯太町、そして岡山県では新見市の千屋地区、こういった圏域が大きな被害を受けたわけでございます。

私の町も震度6弱ということでございました。ただし、気象庁の震度計がございませんで、科学技術庁のデータでございますけれども、これが情報として出ないということで、随分内外から問い合わせ、あるいは苦情があった経緯がございますけれども、おかげで、知事さんの御厚意で、県の方でつくっていただいたということでございますけれども、そういう被害の町でございます。

実は私、2年前の10月6日はちょうどこの会場におりまして、空から落ちてくる、これはもうだめかなと、一瞬よぎったわけでございますけれども、すぐ飛んで帰ったということでございます。ただし、途中、本当に命からがらに帰ったというようなことございました。まず私の町は、どうしても高齢化が進んだ町でございます。老人だけの世帯、あるいは独居老人が多いわけでございますけれども、そういう中にありまして、全部、全半壊が12戸ほどございました。それから、一部損壊が500余りでございますし、避難勧告をした世帯が3世帯の7名。自主避難していただいた家庭が4世帯の12名。こういう状況でございます。比較的被害も少なかった面があるわけでございますが、私も直ちに現地に出かけまして、この目で見たいと

いうことで消防団長と行動をともにしました。老人の家庭に行ってみますと、戸がもうねじれちゃって、ようやくそれで家が支えられておるといような状況。一人で本当に困っておられた世帯。あるいはもう夜の前でございますけれども、電燈が下に落ちて、年寄りだけの世帯で今晚電気がつかないといような状況等がありまして、ともに団長と一緒に支援をしたという経過がございます。さらには、池の水が庭一面に流れ込んで、いわゆる液状化現象でしょうか、そういうことがあって、ちょうど今水が引いたといような現場に行ったりいたしました。

そういう現場を見るにつけ、これはやはりお年寄りの世帯を中心に何とかしなきゃならない、そういう気持ちで行政をやったわけでございますけれども、おかげで、病院あるいは福祉保健課を中心に、そして県の保健婦さん等の応援を受けまして、やはり心のケアといいますが、このことが一番だなということで、情報収集をしながらお年寄りの世帯をいかに安心をしていただくかということが一番だなということを感じた次第でございます。

町職員で正職員が約200名、そして臨時を入れまして300名ほどおりますけれども、全員体制ということで情報の収集と現場に出かけ、ある程度住民の方も安心をしていただいたのではないかというふうな気がいたしております。あわせて、この地域におきましては、民生委員さん、あるいは自治会、自治会が35自治会あり、その下にまた小さな組織があるわけですが、その自治会、そして公設消防とあわせて自衛消防、各自治会に自衛消防がありまして、自治組織、これが大きな力を発揮してくれたと、このように思っております。

一つは、避難場所の問題。避難をするにつきまして、どうしても風水害、そういっ

たことが中心の避難場所ということを設定をしておりましたから、避難することによってまたそこが危険だということになったり、学校が避難場所ということにしましても、その避難場所までが遠いというような問題等ございまして、これも一つの反省材料にしたわけでございます。それから、いかに人海戦術といいますか、ボランティアが必要だと。今回の地震は、どうしても屋根が中心でございました。雨漏り、屋根が壊れたことによりまして、中におれないという状況がありましたので、直ちにビニールシート、これの調達を命じたところが、ちょうど県の措置もいただいてタイミングがよかったわけですけれども、これも助かったという状況でございます。しかしながら、お年寄りがたくさんおられて、自分たちではビニールシートが敷けない。そういう中で、やはり地域が自治会中心に、隣の若い人たちが、自治会挙げて取り組んでいただいた。こういうことが大きな力になっておるといふふうに思っております。

それから、情報の問題では、防災無線、先ほどの自治会組織、自治消防、そういったものが随分活躍したといふふうに思っております。

それから、今の住宅支援の問題でございますけれども、壊れた住宅につきまして貸付制度というのがあるわけでございますけれども、お年寄りの家庭では保証人をとって借りるといふことがなかなかできない状況で、災害対策会議の中で何とか支援する方法はないかということその会議でも私、申し上げたわけですが、町長、それは個人的な問題でそういうことをやってたら、これは今後困りますよといふようなことがあったりして困っていたところに、ちょうど県の方からこういう制度はどうかというお話をいただいて、本当に助けの船が出たわけでございます。それは、県

と、そして町と、それぞれ3分の1ずつ支援ができる、知事さんの御英断でこの制度をつくっていただいたということで、特に高齢化の高い本町の場合、助かったということでございます。

今後のまちづくりの方向ということにつきましては、また後段で申し上げたいと思いますので、とりあえず私の方からは、以上、状況を説明させていただきました。

○片山知事 ありがとうございます。

私も、鳥取県西部地震が起きまして、翌日から毎日ヘリコプターでこちらに飛んできて、被災地をずっと連日回ったんですけど、そのときに、矢田町長さんとも一緒に日南町の被災地を回ったのを、本当につい昨日のように思いますけども、月日の経つのは早いもので、あっという間に2年経ってしまいました。ありがとうございます。

それじゃあ、山下さん、お願いします。

○山下氏



それでは、日野町での日野ボランティアネットワークの取り組みについてお話をしたいと思います。

日野町は人口が約4,500人で、そのうち3分の1を高齢者が占めている、高齢化が進んだ町です。県西部地震では、最大震度6強を記録しまして、大きな住宅被害を受けました。当初は、町内で民生委員さん、自治会長さん、それから隣近所の助け合いということで安否確認も進みまして、人的被害も最小限に抑えられています。けれども、内部の力だけではどうにもならない状況になっていたのが当時の日野町だと思います。そこに、県内だけじゃなくて、全

国から多くの支援をもらって、その一つがボランティアでした。ここにいる私も、それが縁でできた一人です。

当時、日野町にはボランティアセンターがなかったんですけども、ボランティアを受け入れねばならないということで災害ボランティアセンターが設置されまして、地震の直後から、瓦れきの片づけですとか屋根のブルーシート張り、それからさまざまな復興イベントの運営ですとかホームページの開設といったことまで、さまざまな活動を続けておりました。

けれども、年内のうちはかなりいろいろな活動の依頼があったんですけども、年が明けたころから急にボランティアの依頼が減ってきました、そのころは町内の方では、まだ実際には家の片づけはまだまだといった声が聞こえてくるという状況がありましたし、それから、地震直後にボランティアが町内を回って調査をしたときに、高齢者だけで住んでいて、とても手に負えるような状況ではないのに、特に頼むことはありません、一人でできますというような方が多くいまして、この冬の時期にも実際にはニーズが潜在化してるのではないかとこのことを恐れていました。

この当時、ボランティアセンターはどういう状況だったかといいますと、雇用期限が3月までという臨時職員が3人で勤めておまして、4月以降にセンターの存続というのは全く見通しがない状況。ボランティア活動もどうなるかわからないというような時期でした。ですが、町内の状況を見たところから、もう一度やはりきちんとした調査をしなければならないだろうと。その中からボランティアができることは支援して、また4月以降にボランティアあるいはボランティアセンターが果たしていくべき役割があるかどうかということを確認しようというような話になりました。

た。

こうしたことから、昨年の2月から3月にかけての1カ月間、高齢者世帯と、それから仮設住宅の方を中心にしまして、訪問による聞き取り調査を行いました。その対象は、町内の全世帯の20%に当たります300戸に行っています。地震当初の調査の結果から、困っていることはないかというふうに聞いても収穫がないということはわかっていましたので、健康状態ですとか食事のことですとか、いろいろな話をする中から困り事をきちんと聞いてくるというような手法をとりました。

この時期、中山間地にあります日野町では雪の日もありまして、とても寒い状況で、調査に回ったボランティアもですし、それから民生委員さんに同行していただいたんですが、家にたどり着くのも大変なケースというのもありました。けれども、実際に高齢者はその中で生活をされているわけで、特に、町の中心部から離れた集落に住む人にとっては、生活が大変厳しい時期に、その家を訪問していろいろなことが聞けたということの意義は大きいと思っています。

その内容というのは、高齢者の震災体験を含めた生活実態を把握できたということです。まず、復興をもとの生活に戻るといふふうに考えますとまだまだの状況で、とりあえず生活できるレベルということがわかりました。つまり、ボランティアへの依頼ということは入っていませんでしたけれども、実際にはまだまだ助けを必要としている状況であるということです。

さらに、いろいろ話を聞いていくうちに、地震以前から、例えば粗大ごみの片づけなどが高齢者だけではできないですとか、それから、話し相手がなくて生きる張り合いが感じられない生活を送っていたところに、地震によって大きな精神的なダメージ

を受けたといったことですか、それから、福祉の施策では、一般的に重点対象として、ひとり暮らしの方というのを据えていますけれども、実際には高齢者世帯も世帯によりまして、例えば老老介護ですとか、より困難な状況を抱えてるといような状況もわかってきました。その一方では、高齢者の方でもいろいろボランティアの人とか世話になったから恩返しをしたいですとか、自分も何かやりたいという意識を持っておられるということ把握できました。

こうした調査を通しまして、参加したボランティアが、こういった地域課題を自分の目で見て実感しまして、これを何とかしなければいけないという思いを抱いて、特に、その中に町内の方が多く参加していたということが大きな意義でした。

こうした経験を通しまして、ボランティアセンター、4月以降も、職員は1人になりますが、とりあえず継続ができるということになったんですが、それまで活動してきたボランティアの間で、震災を契機にボランティア精神というのが町に根づいてきているので、これを住みよいまちづくりに活かしていこうということで、日野ボランティアネットワーク、日野ボラネットという組織を立ち上げまして、現在も活動を続けております。

この活動を通して、まちづくりのためにどういったことがポイントになるかということをお考えすると、1つは、住民の中にせつかく何かやりたいという気持ちが出てきていますので、これを何とか活動につなげたいということと、それから、団体とか個人を問わずに、町内のボランティアのつながりというのをつくる。それから、日野町という舞台は小さいところですから、その中で何か課題解決を行うときには、行政も社協もボランティアも手を携えて勉強していかないと解決できないだろうといったよう

なことで、そういったことを通してボランティア活動がうまく推進できるようにということが1つ。

それからもう一つは、調査を通しましていろんな困り事というのが見えてきましたので、これは1回きりで済ませるのではなくて、こういった地域課題が継続的に顕在化できて、それから解決できる仕組みづくりというのをしていかなければいけないだろうということをお考えしました。

こういったことから、1つはまず、行政とか社協との連携をずっと模索してきましたんですが、とにかく人口が4,500人で過疎・高齢化が進んでいるということは、結局町内で何をやるにしても大体担い手というのは限られているということがありますし、いろんな機関が同じ目的を持ちながらも違う方向を向いていても、混乱するだけで何も得るところはないだろうということで、いろいろと声をかけたりとかしているというところなんです。

その中では、昨年の末には、県の日野総合事務所の方で主催していただいて、行政、社協を交えて懇談会を行いまして、その中でいろいろな提案をさせていただいたりとか、それから、町の方に依頼がありましたので3カ年のボランティア活動推進計画というのを提出したりということをやっています。ですが、町の方でも中期計画でボランティア活動の推進ということを取り上げられていますが、具体化はこれからかなという感じがしています。

あともう一つは、調査の結果を踏まえまして、日野病院の方に心のケアについて何かできないもんですかねというような相談をしましたところ、ことしの1月から週1回、震災カウンセリングコーナーというのを設置していただきまして、震災を初めとしたいろいろな不安とか悩みに対応していただいています。これもボランティア活動

中に心配な方があった場合にはチラシを渡したりして、こちらの案内をするといったこともやってきています。

もう一つは、これまでさまざまな企画を行ってきたんですが、この4月から高齢者誕生月プレゼント企画というのをやっていきます。これは、その月に誕生日を迎える70歳以上の高齢者だけで暮らす方に、手づくりのプレゼントとカードを届けまして、地震後の状況とか困り事を聞くというようなことをやっておりまして、幸い、県の共同募金会からの配分をいただいております。高齢者の見守りとボランティアの育成ということを力を入れていこうということです。

半年過ぎたんですけども、この半年間で、高齢者からは自分でも誕生日を忘れていたんだけども祝ってもらえてうれしいといったようなことで、元気を出してもらえたりとか、それから、聞き取り調査のときにいろいろ心配事があったんですけども、その後の状況を聞いていくことによって、ボランティア活動とか、それから場合によっては公的なサービスを案内するといったようなことによって、少しずつですけども解決に結びつけているということがあります。高齢者の中には、今は困っていることはないというふうに言われても、そうやって気にかけて訪問してもらえてすごくうれしいというような方もおられるということがあります。

もう一つ、この企画では、ボランティア活動の推進という意味では、毎月プレゼントをつくっているんですが、そこには町内のいろんな団体に、月々違うところに協力をいただきまして広がりを持たせているとか、それから、実施が毎月の第2土曜日ですので、学校が完全週5日制になった小・中学生、高校生が多く参加してくれているということがありまして、子供が少なく

なっている町内の中では、子供が訪問してくれているというだけでも喜ばれているというような状況になってきています。

現状の取り組みについては以上です。

○片山知事 ありがとうございます。

以上、4名のパネリストの皆さんに、それぞれ被災の体験、そのときの活躍ぶりなどをお話しいただきましたが、コメンテーターとして室崎先生に、今の4人の方の発言に対して感想とか助言とか、何でも結構ですからお話をお願いします。

○室崎氏



助言はあんまりないんですけど、いろいろ教えていただいてよかったと思うんですが、1つ、1番目は、私の話とも関連で、自然というものをよく知らないといけないよというのは、虻田町長さんの話ですごく出てきたと思うんですね。事前にみんなが逃げていて、泥流が起きたときにはみんな人がいなくてよかったよという話、単にそういうことなんですけど、我々防災をやってる者からしたら、これはすごい話なんですよね。やっぱりそのことによって多くの人の命を救い得たわけです。これは個人的な話もありますけど、北大の岡田さんは1万6,000人の命を救ったけど、神戸大の室崎は6,000人を殺したと言われてるんですね。地震と噴火は違うんですけど、でも僕は、その救えたというのはすばらしいこと、そういうふうに見えるということはすばらしい。

それはどうしてそういうことが起きたのかということ、1つは、やっぱり先ほど町長さんのお話の中に、下からズドンと突き上

げる地震があったら危ないよ。それはだから、前の噴火のときのいろんな経験とか体験がやはりきちっと伝わってたし、そういう実感がある。それから、北大の岡田先生の研究調査結果でそういうことが非常に科学的に明らかになってたとか、そういう前提がなければうまくいかなかった。やっぱりズドンときたら危ないよという形で皆さんが逃げられたということと、それからもう一つは、普通は例えば我々もよく避難勧告のお手伝いをして、これは逃げないといけないよと言うんですけど、広報車回してもどなたも逃げられない。その前提には、みんながそういうことを知ってないと、逃げてもらえないわけですね。来る来ないかはよくわからないのに、下手するとオオカミ少年になってしまう。そこには一つの、やっぱり自然というのをよく御存じだという前提があったのではないかということで、それは非常に感心させられる話だと思います。

それから2つ目は、これは皆さんの話に共通してあるし、それから今の有珠山の話とも関係するんですけども、さまざまなネットワークとかつながりとか連携というのがしっかりしていないと、やっぱり災害には対応できないよという感じだと思うんですね。これも北大の岡田先生の話ですけど、北大の岡田先生は、安全のための四面体ということですね。四面体とは何かというと、1つは行政だと。1つは市民だと。それからもう一つは専門家。もう一つがメディアだと。これは岡田先生の分類です。僕なんかはそこにNPOとかいろんな入れたいなという気はするんですけど。でも、例えば市民と行政と、それから専門家。そこはもう有珠山の話ですごくよくわかるし、それからもう一つ、岡田先生はメディアと。我々は大抵メディア嫌い、今日おられてますね、悪口つい言っちゃうんですけど

ど。そうじゃなくて、きちっとみんなが手を携えて、やっぱりその危険性というものを理解するし、みんなに広く伝えていく役割を果たしていくという、その中に信頼関係ができてるといことがすごく大切だというふうに思うんですね。

そういう目で見たときに、そういう4つのつながりだけではなくて、例えば県と市町村の関係もきっとそうだし、それから地域コミュニティの中でリーダーと、そのそれぞれの地域コミュニティのメンバーの関係もそうだし、それからNPO、ボランティアみたいな人たちのグループと民生委員とか消防団とか自衛消防組織とか、そういうところの関係もある。それぞれの関係は、結局、みんないざというときはやっぱり力を合わせないとうまくいかないよというのは、これはどの方も言われていることだと思うんですね。やっぱりそういう意味での災害時のネットワークというのをどういうふうにつくり上げていくのかというようなことを、少しこれも今後の点ですごく重要なことだと思います。

それから3点目は、皆さんの言葉とか多くの方に出てくるのは、ボランティアという言葉。阪神大震災がボランティア元年だと言われたんですけど、僕はこれは、単に人手が足りないからボランティアが要するという話ではないんだと思うんですね。これは、一番最後の山下さんの話聞いててよくわかるんですけど、1つは、一人一人の細やかなニーズとか気持ちとかそういうものは、従来の行政の枠ではなかなか、市民が遠くに過ぎて、つかまえない。このおばあちゃんは何を考えてるのかなというようなことは、やっぱりそういう細やかなニーズというのは一体だれがつかむことができるか。ところが、ボランティアだけではなく、ボランティアと地域に密着した、ずっと地域をはいずり回ってる人たちも

よくわかる。そういう細やかなニーズをきちっとつかむ仕組みというのが今の世の中にすごく求められているんだと思うんですね。そういうところで、やっぱり新しいそういう地域をつかんでいく仕組みとしてボランティアがある。

それからもう一つは、これも同じことですが、行政と市民の、結局間を埋めていく。今までは、行政と市民が何か机たたいて何とか反対というようなスタイルが一つのスタイルだったけど、そうじゃなくて、やっぱりそこにお互いをつなぐところの真ん中にそういう一つの接着剤的な、あるいはその意見を伝え合うような、一つのやわらかな潤滑剤を持ったような仕組みとして、ボランティアだとかNPOだとか、そういうものが生まれてきた。それは、鳥取の地震でも有珠山の噴火のときでも、そういうことがやっぱり体験を通じて、新しいそういう一つの仕組みみたいなものが浮かび上がってきて、そこにボランティア。だから、単に人手が足りないからボランティアをただで使ってやろうという話ではなくて、やっぱりボランティアとしての存在価値がそこにあるということ、これも考えておかないといけないなというふうにちょっと思っています。

それから4つ目の話が、それぞれの災害の被害の状況を述べられてたんですけども、僕はどの災害にも共通してるというか、最近の災害の共通点というのは、直接被害も直後の被害も大変ですけど、それ以上に、長く、非常に長期化した間接被害。地域の経済的なダメージだとか、いろんなものが折り重なって、非常に間接的な被害が大きくなってる。これは一つの新しい社会の特徴だと思うんですね。

長期にわたる生活の苦しみだとか地域の経済の問題だとかそういうもの、特に有珠山の場合、観光の問題というのは非常に大

きな問題になってきたわけですけども。あるいは、日南町も直後は亡くなられた方はいないけれども、後でお年寄りの暮らしの問題とか、いろんな問題が顕在化してくる。そういう間接的なところに対して、どういう形でそれをサポートしたり支援をしたりしていくかという、あるいはケアをしていくかという、やっぱりそういう災害対策とは従来は直後の何か救出活動とか消火活動が災害対策だと思われてきたけれども、災害対策の幅がすごく広がってきて、心のケアだとか生活支援だとかまちおこしだとか、そういうところまで視野に置いた、きちっとした災害救援のシステムというか、災害対策というものを組み立てていかないと、これからの時代にはうまくいかないよというのが、多分非常にはっきりしてきたことだろうというふうに思います。

5番目でやめます。5番目は、もう結論です。ずっと話聞いてたら、みんなそれぞれ素晴らしいリーダーで、知事さんを含めてです。こういう大きな災害が起きてうまくいったとか、多くの人を救えたという陰には、やっぱりリーダーシップという、個人の力だけではないかもしれないけれども、非常に積極的にそういう被災者の中に入って、そういう人たちをサポートしたり激励をするんですね。過保護にするんじゃないなくて、すごく上手におしりをたたきながらというか、力を発揮させながらするような、そういうリーダーシップを持った人は必ずいるし、今後の対策としてそういう人をしっかりたくさんつくっていかないといけないなというふうに思っています。

もっとたくさん、いいお話があったんですけど、私がとりあえず感じたことは以上の点です。

○片山知事 ありがとうございます。

私も今、4人のパネリストの皆さんの話

を伺い、また、今、室崎先生のコメントを伺って、いろんなことを考えさせられました。

最後に言われたことは、私が言うのも変なんですけど、私は知事になろうと思ったときに一番最初に脳裏をかすめたのは、神戸の震災のときのことだったんですね。私は、当時神戸の震災があったときには、鳥取にやっぱりいまして、県庁で総務部長というのをやってたんですけども、さっき杉山さんが言われた5時40分くらいですか、本当に鳥取でもぐらっと揺れましてね、もうびっくりしたんですけども、それからだんだんだんだん神戸の被害の実態というのが明らかになって、大変なことになった、これは県庁とか市役所は大変だろうなと思ったんですね。その後はいろんなことがありますけども、そのときのことを思い出して、自分が県という組織、団体の長になろうとしたときに、やっぱりもしああいふ大きな地震でもあったら、自分は一体どうするだろうかというのを最初考えたんです。ですから、選挙に立候補するときには、防災安全のまちづくりというのを大きな公約の一つにしたんですけどね、あんまり有権者の皆さん関心ありませんでしたけど。

その後、いろんな組織の見直しとかマニュアルの点検とか地域防災計画を全部洗いざらい見直すとか、自衛隊との関係をつくるとか、いろんなことやってきたんですけどね、一つは、やっぱり自分の目でいろんなことを見ておくことがいいだろうと思いました。やはり緊急のときはもうトップダウンになりますから、下から日常の仕事みたいに積み上がってくるのを待っていてはだめですから。

それで、たまたま台湾でやはり大きな地震があったんですね。これが今から3年前になるでしょうか、すぐに私のところの防災の責任者であります防災監に、直後に

見に行ってもらったんですね。その後、私も行ったんですけども、そのときにおもしろい話がありまして、もう鳥取県は阪神淡路の大震災のときに、隣の県で大きな地震があって、県もそのときの知識、経験を蓄えてるだろうから、わざわざ台湾まで行く必要ないじゃないか、それは物見遊山ではないかと、こういう一部異論があったんですけどね、でももう5年も6年も前の体験というのは薄らいでますし、そのときの経験した人は職員ももうかわってますから、やっぱり新鮮な地震と言うと変ですけども、新しい地震の後の、どういう現状になってどういう対応の課題があるというのは、やっぱり幹部が見といた方がいいだろうというんで行ったんですけどね。これがやっぱり随分大きな力になりましたね。実際行ってみまして、本当に大変で、ここの自治体の首長さんなんかはもう大変だろうなと、自分で思うんですね。そうすると、やっぱり今以上に、これまで以上に、もしも自分のところであつたらどうしなきゃいけないのかということ、常にまた改めて考えるようになるんですね。だから、そんなことが重要だろうなと思いました。

それから、さっき室崎先生が北大の岡田先生の4つのことを言われて、1つがメディアと言われた。私もメディアは本当に重要だと思うんです。といいますのは、災害のときに、情報提供というのは一番重要で、その情報を提供するときも、正確に早くが必要なんですけど、ともすれば、役所が出す情報提供って、不正確なことはそんなないかもしれませんが、遅かったりもたまたしたり、あるんですね。私のところでは、災害が起きたときに災害対策本部をつくりましたけども、もう全部公開にしまして、マスコミと一緒に仕事をしたんですね。ですから、我々が大きな長机の上で、中で協議をするわけです、ど

うしようこうしようって。住宅再建もどうしようこうしようとやるんですけど、もうそれ全部オープンなんです。時にはひそひそと聞こえないように言うこともありますけど、それでも同じ部屋にいつも出入り自由なんです。ですから、マスコミの方は、我々が議論をしていることを大体全部聞かれているわけです。議論の過程を知った上で結論が出たのを聞きますから、実に正確に、それから、決まったらもう即座に報道していただけるんですね。わざわざ報道室をつくって、そこに職員が行って資料を配って説明するとか質問を受ける、そういうことは一切ないわけです。もう質問もほとんどないわけですね。これが本当によかったなと思っています。最初は、そんなこととして大丈夫ですかとかあったんですけど、一切トラブルもありませんでしたし、そんなことを今思い出しています。

ちょっと質問をさせていただきたいんですけどね、長崎町長さんは非常に迅速に的確に避難誘導されたということなんですけど、防災訓練とかそういうことをされてたんですか。

○長崎氏 今回の有珠山の噴火の前の噴火というのは、23年前だったわけですね。その際は、どちらかという、私の町の洞爺湖温泉地区が大分被害をこうむったわけですけども、それから三、四年は避難訓練といいますが、大体噴火災害そのものはそんなに怖いものではないんですね。噴火災害の起きたときには、すぐ建物の中に入れ、ホテルに逃げろ、そういう指示で、そういう訓練はしましたけれども、やっぱりそれもいつの間にか風化してしまったというのが実情ですね。

ですから、今回の避難やなんか、先ほど知事さんが言われたように、非常の場合はトップダウン方式で、やっぱり決断という

のが一番大切なことでないのかな、このように思いました。

○片山知事 ありがとうございます。

でも、訓練されてないときに、号令一下、皆さんよく避難されたもんだと思って感心しますけれども。

○長崎氏 それと、やはり職員が、私の町の噴火については、20年から30年周期ですから、どちらかといったらは災害のうちでも幸いな方だと思います。それでも、職員は前の噴火を経験しているのがもう3分の1くらいきりないわけですね。それで、今回の噴火については、私、役場OBを動員しまして、OBを役場に待機させて、いろんな前の教訓を若い人たちに教えてもらおう、そんなような機関を置くことをとったわけですけども。

○片山知事 ありがとうございます。

パネリストの皆さん方の間で、他のパネリストの皆さんにちょっと聞いてみたいとか、もう少し詳しく知りたいとか、室崎先生に反論があるとか、そういう方おられませんでしょうか。もしおられたら。よろしいですか。

それじゃあ、杉山さん、さっき避難所のことをお話しになって、幸い水とガスですが、電気もあったんですか。電気は来てなかったんですか。

○杉山氏 電気と水は来てたんです。水のないおうちもあったけど、たまたま私たちの動いてる福祉センターは水と電気が来て、そこへ水を皆さんくみに来られました。

今の情報ですけども、張り紙をして、まだそのころこういうメディアもちゃんとできてませんので、だから手づくりの張り紙をして、水ありますよ、高丸の地域福祉

センターに来たら水がありますよというようなことで、水のない地域にもお知らせして、皆さん、水くみに来られました。だから、もう毎日長蛇の列。

電気が来てたということは生活できますね。水と電気が来てるということで。ガスはそうですね、約40日、50日近くガスはとまったんです。お風呂に入れなかったというようなことがありますけれども、二昔も、もっと前ならば、そんなこと平気だったでしょうけど、今のこの生活に慣れていて、ガス、水、電気、これはもう本当に生活大変ですね。

○**片山知事** でしょうね。それで、おにぎりをつくられたというんですが、お米の備蓄などはしてあったんですか。

○**杉山氏** いえ、持ち寄りです。例えば、家に2キロまだあるわ、5キロ余ってるわと持ち寄って、それじゃ足りないの、区役所へ行きました。そしたら、神戸市から40キロ備蓄米があるから届けるよと言っていたのが10時なんです。届いたのが夜11時。それだけ交通事情が悪くて、それでも11時まで待っていて来たから、次の日は市役所から届いたお米で、18日の分はできたわけなんです。大変でしたね、あのころは。

○**片山知事** 本当に御苦労さまでした。

矢田町長さんは、本当に過疎化が進行して、高齢化も進行しているところで、被災者も総じてお年寄りの方が多かったわけですけどね、特にお年寄り、私もずっと被災地を回ってみて、一番の問題はやっぱりお年寄りのケアだと思いましたし、というのは、お年寄りがやっぱり一番弱者ですから、災害のときには一番弱者の方がお年寄り、その中でも特に、住宅が壊れたとか、

失った人はもちろんですし、傾いたとか屋根が飛んだとか、そういう人たちの不安が一番大きかったと、私は印象を持ったんですけどね、住宅再建以外に何か、お年寄りのケアといいますか、メンタルケアで何か気をつけられたようなことがありますか。

○**矢田氏** そうですね、どういう地区にはどういう方がいらっしゃるかということは大体普段から見えておりますので、保健婦を中心に、それとお医者さん中心に足を運んでいただきまして、大体どういう状況かということ、やはり家庭訪問をしてどうですかということ伺いながら、コミュニケーションを図ることによって不安がなくなるということが、今回随分体験としてあったというふうに思いますし、直接家の方をどうするかということについては、隣の方が少々の修理はやっていただけるといようなことと、それから、先ほどありました本格的な復旧については支援制度ができたということが、比較的早い時点でそれができたんで、あれがもうちょっと、いつになるかわからんというようなことでしたら、まだまだ不安が、お年寄りの方は特にですけども、あったではないかなというふうに思いますし、雨漏りはすぐビニールシートをお配りをして、自治会中心に措置してくださったということがありましたんで、それと、500ぐらいの一部損壊でしたけれども、そのうちの老人家庭ということについては、比較的措置がしやすかったというふうに思っております。

○**片山知事** ありがとうございます。

私もずっと被災地を回ってみまして、さっき言いましたように高齢化が進行して過疎化が進行しているところが多いわけで、災害弱者のお年寄りをどうやって勇気づけるか、不安を解消するかということが最大の課題だと思ったんですけども、非常にい

い条件があるなと思いましたが、コミュニティの力が非常に強いわけですね。さっき町長さんも言われましたけども、どこにどういう方が住んでおられて、おばあちゃんがどこの部屋に寝てるはずだとか、そんなこと皆さんよく御存じなんですね。ですから、我々行っても、ここの2階にはどういうおばあちゃんがいる、奥には大ばあちゃんがいるとかですね、教えてくださいんですけど、そういうコミュニティの力が非常に強いもんですから、そうすると、なるべくそのコミュニティが壊れないようにもとに戻してあげる、生活の場をもとに戻してあげるということをすれば、このコミュニティの力、結束によって、皆さんがまた元気を取り戻すのではないかなというのが、私のそのときの印象だったんですね。

そうしますと、一番の課題は、やっぱり住むところをもとどおりになるべく、もとどおりににはなりませんけども、なるべくもとの状態に近い状態に回復していくというのが基本だろうと。そうすると、住宅というものが一番のポイントになるわけで、そうすると、何とか住宅を、自力でやっていただくが一番いいですけども、そういうお年寄りですから気力も視力も体力も衰えてる方多いですから、そうすると、それを何とか支えてあげることがコミュニティを守る、そしてコミュニティの力を再び発揮してもらって一番の要素になるのではないかなと思って、住宅再建というのをやったんですけども、結果的にはほとんどの方が震災によって地域を去るということがありませんでしたので、大変よかったです。

○矢田氏 ありがとうございます。そのことが一番だったと思いますけれども、普段私のところは、いわゆる訪問介護、訪問看

護、そして訪問診療ということをやっております、どこにそういう方がいらっしゃるかということで、先ほど申し上げました医師あるいは看護婦、そしてヘルパーさん等々が一体となってできたというふうに考えております。

○片山知事 ありがとうございます。

山下さん、さっき室崎先生が、ボランティアの役割というのはいろいろあるけれども、1つはきめ細かいニーズに比較的対応できる、確かにそうだろうと思うんですね。行政がやりますとね、どうしても公平さとか平等とか決まりということになるもんですから、一律になってしまって、それぞれの個人個人の対応にうまくフィットしたケアとかお手伝いができないんですね。その辺はボランティアですと、公平さをなくしてもいいとは言いませんけども、それでも、行政が要請されるような一律性というのは必要ありませんから、そういう面での対応というのはしやすいと思いますし、それから、もう一つ室崎先生が言われた、行政と、今回の場合は被災した方との接点で、緩衝材としての役割も重要だと思うんですけどね、往々にして行政というのは、さっき言ったように公平、平等、一律ということをやりますし、それから、現場に疎いということがあると思うんですね。2年前の鳥取県の震災の場合には、できる限り県庁の幹部は現場に行って足を運んで、現場の様子を見なさいということで、私自身も一緒になって現場見たもんですから、比較的現場主義が実現できたのではないかなと思うんですけども、それでもやっぱり行政の限界というのはあると我々は自覚してるんです。

そういう観点で、ボランティアを実際に現地で実践されて、町政とか県政とか、行政との間に入っているいろいろ気づかれたこと

があると思うんですけども、言いにくいことも含めて、もしあったら率直に聞かせていただいたら、いい次の課題の解決になると思うんですけども。

○**山下氏** 今考えてる一番大事なことは、例えば行政にしかできないこと。例えば公平なサービスですとか、例えばあとは物理的な面での保障を幾らかやっていくということは、これはとてもボランティアの手ではできないことはありませんから、そういったところをやる。あるいは、ボランティアが細やかなことをやっていくというのは、そういったふうにそれぞれ特性があるということは事実だと思うんです。なんですけれども、私はそこでとどまってはいけないのではないかと考えています。

といいますのが、行政ではここまでだから後はボランティアやってねとか、ボランティアはこんなにやってるんだから後は行政やってよということを言っている、結局、それぞれの特性を活かして活動していくということと、それから目指すところというのはやはり違うことだと思いますから、もし例えば日野町というところを舞台にして、高齢者についてのサポートをやっていくというときには、どういうふうな町をつくっていくかということについての目線合わせをまずしなければいけないと思っています。その中で、行政はここまでできるから後は頼むということが、結局信頼関係として言えるかどうかということだと思うんです。そうすることによって、行政ではこの部分をやって、自分たちができないことはうちの範疇外ということではなくて、ボランティアにやってもらう。そのかわりに、そこで得てきた情報を、プライバシーとかいろいろ気をつけるべき点はありますけれども、必要なことに関しては情報交換をきちりやる。こういうことをやっ

ていかないと、本当の意味での連携というか、単純にお互いがそっぽを向いてすみ分けをするということではなくて、一緒につくっていくということをそこまでやっていかないと、これは日野町だけではなくて、鳥取県、高齢化が進んだ町はほかにもいっぱいありますし、県全体の活性化ということにはつながっていかないのではないかなというふうに思っています。

○**片山知事** ありがとうございました。

それでは、次のもう一つの、今回のパネルディスカッションのポイントであります、これからのまちづくりに向けての課題、被災をして、その中で本当に必死に復興を目指して、やっとそれぞれ、それなりに復興してきてるわけですけども、それだけに終わらせないで、この体験を活かして、これからのまちづくりに活かしていく。これ室崎先生の基調講演にもありましたけども、そういう観点で、それぞれ各パネリストの皆さん方に、どんなことを考えておられるのかということなどについて、お話を順番に聞かせていただけたらと思います。長崎町長さんからお願いします。

○**長崎氏** 私の町は、先ほども御説明申し上げましたように、洞爺湖という北海道の有数の観光地も抱えております。大体3次産業が7割を占めているということで、やはり洞爺湖温泉に依存する町でございます。

そんなことで、今回の有珠山噴火では、役場所在地の方が先に噴火をし、その後、洞爺湖温泉の裏山が噴火したということだったわけですけども、23年前の噴火の翌年にも泥流が発生しまして、そのときにつくった砂防施設、これが今回幸いに発揮しまして、結局、先ほど申し上げたような公営住宅だとか町の公共施設は大きな被

害をこうむったわけですけれども、温泉街そのものはほとんど無傷だったわけでございます。

しかし、やはりこういう災害で、特に道路網がまったく切断されてしまったというようなことで、やっぱり観光、そして地域経済、これに及ぼす影響というのは大変はかり知れないものがあるわけでございます。そういう意味から、とにかく町の復興をどういう形にするかというようなことで、早速、まだ完全に住民が避難解除されていない時期でしたけれども、私、町のそれぞれの関係の方々に復興対策の懇談会を組織をいたしまして、その人たちの意見を聴取したということでございます。

ただ、まだ噴火活動中で、そしてまた避難してる方々が相当いるという時期でしたから、やはり相当いろんな意見が、むしろ行政に対しての意見が多かったというようなこともございました。しかし、これらの意見と、その後町の若手の方々からいろんな組織が出てきました。そして、まちづくりをどうしよう、温泉街をどうしようというような委員会が設置されましたので、これ幸いと、噴火の年の10月に復興対策協議会というものを立ち上げさせまして、復興計画を作成をさせまして、これが今年の3月にでき上がったということでございます。

この復興計画に基づいて、今まちづくりを起こしているわけですけれども、21世紀の火山を活かした観光地づくりというようなことをテーマにしまして、いろんな、噴火によって誕生したと、いい意味で言えば誕生と言っていると思いますけれども、被災を受けた学校、あるいは地殻変動が特に多いわけですが、地殻変動によって10メートルぐらいの断層などもきております。さらに、80メートルぐらいの山もできたというようなこともございます。そ

れと、町営の浴場なども何とか残すようなことできないだろうか。これも、砂防施設内にかかったわけですけれども、北海道と協議いたしまして、これらの遺構を残してもらおうというような形で、それらを一つの観光の目玉にしようというようなことで、今復興の作業にかかっているところでございます。

幸い、昨年7月に、新しい噴火口を散策できる、噴煙を吹いてるそのそばまで行って見えるような散策路をつくりました。これも役場職員の手づくりで、まくら木を相当数手に入れまして、これを散策路に敷いて散策させる。昨年7月からで大体40万の人がこのこの噴火の跡を見学されておりますし、今年ももう既に50万以上超えての、新しい観光資源になってきてんじゃないかなと、こんなふうにも思っております。

ただ、ホテルは順次回復してきてるわけですが、土産店のシャッターがとにかくあかないというのが実態でございます。そこの空き家、空き店舗を何とか活用しようということで、今、新しい若いグループで検討なども進めているというところでございます。

とにかく、今回の噴火で一番の打撃は、やはり道路が完全に閉ざされてしまったということでございますので、道路の確保と新しいやはり避難の場所、こういう全町避難というのはもう全く想定もしてなかったことでございますから、これはやっぱり近隣市町村との連携ということが一番大切でないだろうか。こういうことでの新しいまちづくりをしていこうと、こんなふうな考え方でございます。

○片山知事 ありがとうございます。

それでは杉山さん、お願いします。

○杉山氏 先ほどからお隣の町長さんのと

ころは、ちゃんと隣はだれかと把握してる。垂水区の場合は、震災までは、隣は何をする人ぞ、知らない方が美德というような雰囲気だったもんですから、震災で大変わらなくて困ったんです。だから、これは原点に戻って、向こう三軒両隣、きっちりと把握しなければいけないんじゃないかということで、そんなような活動を今始めております。

それで、高丸の場合は、声をかけ合い、見つめ合う高丸というようなことをキャッチフレーズに、平成9年からそういうことを始めてるんですけども、子供にも声をかけようと。昔はよく、世話焼きおばちゃんて声かけたじゃない。餓鬼大将がいて、その子見守ったじゃないのというようなことで、私たちもうちょっと子供に、いい意味での世話焼きおばちゃんになろうということで、声をかけ合い、見つめ合う。眺めるだけじゃない、しっかりとその人を見ようということで活動を始めております。

その中の一つに、65歳以上のひとり暮らしの方のおうちへ、2人から4人、5人のグループをつくって訪問するわけです。民生委員さんがやってる友愛訪問、あれをもうちょっと心を込めてやろうということで、1人で行っても次のグループに連絡ノートで回そうじゃないかと。きょうAさんのところへ午前中行って、ちょうど遠くにいる娘さんが訪ねて来ていて、楽しく話をしたとか、どんなささいなことでも、訪問したときの様子を書いて、次の人にそのノートを渡す。だから、1カ月のうちのいつ自分が行くかということぐらいはちゃんとリーダーが持っておく。そして、そのノートを連絡するというのを今も続けております。

それが今、2年前からは神戸市の応援を得て、生きがい対応型ミニデイサービスというのを始めております。場所は、福祉セ

ンターを使う人、それから小学校の空き教室、小学校が割合教室があいてるんです。ところが、これなかなか空き教室とは言わないそうですね。ゆとり教室と言うんだそうです。空き教室は貸せないという教育委員会のかたい話で。ところが、高丸小学校の場合は、あれも校長先生の心意気ですね、いいでしょうということで、空き教室を2部屋一つにしたわくわくルームを使わせてもらって、日曜日、近くのおばあちゃんたちが十四、五人、これもあんまり多くてはいけません。10人から十四、五人のお年寄りを、歩いて来れるように、送り迎えはしないんです。歩いて来れるお年寄りに来てもらって、我々がお世話する。私たちは、たまたま私がNPOを立てたものですから、そこでホームヘルパー3級養成講座を開いて、そこで修了した人、3カ月で修了できますのでね、修了した人が、4期開いて今200名できたんです、垂水区の中で。その人たちがお手伝いをする。十二、三人に4人ぐらいのヘルパーさんでお世話をする。10時ごろ来て、3時ごろに帰る、そういうミニデイサービスというのを今始めております。

それから、そこに来れないお年寄り、そのお年寄りには配食サービス、これも神戸市が選んだ弁当会社から持ってきたお弁当を私たちが配る。弁当屋さんが配るんでは、はい弁当ですよになるけれども、私たちが配るときには、これも先ほどの見守り、連絡ノートのあれも生きていますので、“上がって”と言うおばあちゃんもいる。お茶入れて、ちょっと起こして、いろんな用事を言いつける。そういうようなのも対応をしながら配食サービスというのを、おととしの12月でしたか始めて、もうすぐ2年になるんです。最初、2軒だったんです、私たちの高丸地域で。今、1カ月700食配っております。というようなことで、伝

え聞いた人が、また市へ申し込む。それから、お弁当屋さんを通してうちへ来るというように、少しずつお年寄りの見守りも、何かハートのある見守りができてきつつあるのではないかな。

それから、子供。子供の方は、今、兵庫県がトライやる・ウィークというのを中学生に向けてやってるんです。もう四、五年になりますか。その子供たちを社会生活体験といいますか、例えば、うちの福祉センターのお年寄り相手、給食のお世話、デイサービスを手伝いに来る。お花の手入れ。それから、お店屋さん、パン屋さんとか喫茶店とか、それから新聞配達の手伝いとか、何かいろんな社会生活体験のトライやる・ウィーク。その中学生たちも今、私たちの手伝いに、これは毎日じゃないですけどもね、期間が決められて、今度11月の第1週からまた1週間ほど来る予定になってるんですけども、そんなふうにして子供との触れ合いもできている。

それからもう一つ、イベントによるまちづくりということで、垂水は春になるとイカナゴというちっちゃなお魚がとれるんです、2月末から3月にかけて。このつくだ煮がまたとってもおいしいんです。くぎ煮と称してやってるんですけどもね。そのくぎ煮をもうちょっと使って、イカナゴ使ってまちづくりをしようということで、垂水区民に呼びかけて、歌詞募集。できてきた歌詞に作曲してもらって、歌ってもらってというのを、全部垂水区の住民で、それも30前の若い人たちが皆応募してきた、そこからできて、「いかなごGO!GO!」という歌をCD化したんです。きょうかけてもらおうかなと思ってたりしてたんですけども、後ほど置いて帰りますので、また聞いてください。そのCD、もう末は紅白だよというようなことで、今頑張ってる振りつけをして、踊りながら楽しい

まちづくり。これには、幼稚園から小学生、皆子供たちが出て踊ってくれてますので、神戸祭りとか垂水のイベントにはいつも、今日みたいなこういうときには、先ほど太鼓でした。うちは「いかなごGO!GO!」で子供たちが踊ってくれる。そんなようなことで、楽しくやっております。

○**片山知事** ありがとうございます。

それでは矢田町長さん、お願いします。

○**矢田氏** 今回のまちづくりということですが、震災の教訓を活かしていかなきゃいけないということを基本に思っております。西部地震から2年経過をして、そろそろ忘れるということが人間にはあるわけですけども、これを契機に今後のまちづくりということでは、防災意識の向上という面で、地域の防災計画ということをつくることに今進めております。これはやはり地域の人が自分の住むところは自分たちが一番よくわかるということで、住民参画の形で今取り組んでおるところでございます。

特に、先ほど先生の方からお話ございましたけれども、自分のことは自分で守る、そして自分たちでつくるといことのお話でございましたけれども、私たちの地域は私たちがつくるとい考えのもとに、住民参画のまちづくりということ、日南町住民参画のまちづくりということで、今取り組んでおるところでございます。これには、人材の育成、人づくりということで、人材の養成塾ということ、私の町は7つの村があるわけでございますけれども、そこにそれぞれの公民館、町営の公民館があるわけですけども、小学校区を中心にまちづくり養成塾というのを今、立ち上げております。これが、将来の地域を担う人づくりということで、取り組んでおるところでござ

ざいます。

それからいま一つは、情報の整備ということを考えております。今ちょうど県の情報ハイウェイが進んでおりますけれども、これとあわせて、いわゆる日南町民による、町民のための保健・福祉・医療の連携事業ということで、タウンズネット事業ということに今取り組んでおります。これは、今年と来年にかけて2カ年、県の方にお世話になりながら進めておるところでございますが、これによりまして安否確認のシステム、あるいは病院と各家庭とのつながり、あるいは今、テレビの方は、山間地でございますから、4割は共聴テレビになっております。これがやはり老朽化をするという状況の中で、これをあわせてテレビの共聴をなくすることもできるというようなことも考えながら、ちょうどいい機会ということで、情報の整備を今考えておるところでございます。これによって避難所あるいは病院、小学校、中学校等々との連携もとれる、安否確認もとれるということができんじゃないかというふうに考えております。

それから、いま一つは庁舎でございます。実は、この2年前の震災で庁舎がやられまして、屋根は崩れますし、そして壁は亀裂が入って、そういう中で災害対策をとってきたわけでございます。余震が来るたびに壁が落ちる、あるいはモルタルが下の屋根に大きな音を立てて落ちる、そういう中で頑張ってきたわけでございます。あわせて、裏山が崩落をして、大きな何トンもの石が落ちてきたというような環境の中で取り組んだわけでございますけれども、これを契機に新しい庁舎ということで移転新築をしたわけでございます。これには、やはり住民に優しい庁舎ということと情報に対応した庁舎、そして防災に対応した庁舎ということで庁舎を建てさせていただきます

た。その一つが、環境に優しいということで木造庁舎を建てております。これにあわせて、やはり情報化、先ほどございましたけれども、災害時の情報の共有ということもございまして、情報交流センターというような一つの、住民が避難もできるようなスペースの場所を確保した庁舎をつくっております。あわせて備蓄倉庫、そして防災会議室という形での防災に十分対応できる庁舎ということで、環境に優しいということもあわせて、木造の庁舎を建てさせていただいたわけでございます。これが防災に対する見直しの一つになっておるといように思っております。

それから、県境のサミットという一つの協議会をつくっておりますけれども、お隣の日野病院の老朽化もございまして、ちょうど建てかえられたわけでございますけれども、その当時、まだ古い病院に入っていたらっしゃいまして、避難をされました。米子の病院、あるいは日南病院にも来ていただきましたけれども、そういうことを踏まえまして、県境サミット圏域で病院が幾つかあるわけですが、相互応援協定というものを結びさせていただくことにしておりますし、災害の相互応援協定というようなことも考えているところでございます。

この場をかりましてお礼を申し上げたいと思っておりますけれども、県境サミットの圏域の方々から応援に来てくださるというお声をいただきました。しかし、私の町は何かできますので、お隣の日野町なり西伯町さんのお手伝いしてあげてくださいということをお願いしたりいたしました。これも一つの県境サミット圏域の相互のつながりではないかというふうに思っております。

さらには、先ほど知事さんの方からお話ございましたけれども、ヘリコプターで

飛んできていただきました。ヘリポートが
ございまして、グラウンドの砂の上にお
りていただいたわけでございます。これが
原因でヘリコプターが故障したというふう
にお聞きしておりますけれども、ぜひヘリ
ポートはつくりたいというふうに思ってお
ります。

いろいろ、2年経過いたしましたけれど
も、これを教訓に防災に強いまちづくりを
したい、このように思っております。以上
でございます。

○片山知事 ありがとうございます。

県の防災ヘリコプターは、地震の後、2
カ月後に壊れてしまいまして、それは今町
長さんがおっしゃったこととちょっと関係
あるんですけども、やはりヘリコプターと
いうのは、本来ヘリポートとして整備され
ているところに離着陸するのを原則として
るんですが、もう災害のときはそんなこと
言っておられませんので、学校の校庭にお
りるわけですね。そうすると、土ですから、
砂ぼこりが上がるわけです。それをエンジ
ンが吸い込んでしまうわけですね。そうな
らないように、あらかじめヘリコプターが
おりる前には水をまいていただくという、
こういう手間暇がかかるんですけど、どう
してもやっぱり、そうはいつでも物すごい
風ですから、ついついエンジンがいろんな
ものを吸い込んでしまって、2カ月後、駆
使したせいもあるんですけど、点検・修理
に出しました。

それでは山下さん、お願いします。

○山下氏 初めにちょっと、現在行ってお
ります高齢者誕生月プレゼント企画の写真
を見ていただきたいと思っておりますので、済
みません、映像の方をお願いします。

こちらは4月のプレゼントのおはぎを
つくっているところです。こちらは7月の

プレゼントの写真入れをつくっているところ
ですけども、このように、大人も、それ
から子供も一緒になって楽しんでいるとい
うことがあります。現在、毎月、小学生
が楽しみに参加してくれているんですけど
も、その理由の一つには、プレゼントを手
づくりでいろいろつくれるのが楽しいとい
うことがあるようです。

こちらは、6月にはプレゼントにちまき
をつくったんですけども、ちまきを巻く笹
取りを行いまして、これも町内のササが生
えた山を持つ方に協力をしていただきまし
て、左のおじいさん、おばあさんが御夫婦
なんです、一緒にやっていただいたとい
う形で、いろんな方に参加をしていただ
いています。

こちらは9月のプレゼントの月見だんご
とお茶なんです、これは担当された方が
あける楽しみも演出したいというこだわり
がありまして、布を染めてバックを包むと
いうところからやっています。

こちらは毎月プレゼントと一緒に届けて
いるカードをつくっているところなんです
が、子供が色塗りとかそういうことを一生
懸命やってくれています。

一番最後に、これは訪問から帰ってき
てからの報告をやっているシーンなんです
けれども、高齢者のところにプレゼントを
届けると同時に、今の状況というのを聞
いてきていますので、それを個別に、高
齢者の様子とか困り事などを書いてもら
いまして、それから、コーディネーター
担当のボランティアに報告をしてもら
って、一緒に聞き漏れてることとか思
い出し忘れてることを確認するとい
うようなこともやっております。これが
次のことにつながるかなというふう
に思っているところです。

これまでの取り組みを、こういったこと
をやっているんですけども、今後のまち
づくりについてということで考えますと、最

初にまず、問題点を含めて今の評価をしておきたいと思います。まず1点目は、地域コミュニティに関してなんですけれども、これは、先ほど知事も言われましたように、災害のときには顔見知った関係というのがすごく有効に働いたということがあります。ところが、では地域コミュニティは大丈夫と言っていいかどうかという、これは日常では、いろんなところでほころびが出てきているというのが現状ではないかと思います。

それはどういったことかといいますと、例えば、地域コミュニティというのは隣同士の助け合いとかいうふうによく言うんですけれども、実際には、高齢化が進み過ぎていて、ひとり暮らしの方とかがあると、相互扶助というのはもう機能しないんですよ。お互いに声をかけ合うといったような意味でのコミュニティ機能というのは確かに続いているんですが、助け合いということが成り立っているかという、成り立っていないというのが現状だと思います。

それから、何か困り事があっても、隣近所だとかえって気兼ねして頼めないとか、気を使われると思うと、本当は手伝ってあげたいんだけど手伝えないといったような話もいろいろあります。それから、見知った関係なら手を差し伸べられるんですけども、知らない人にまではちょっとというような話というのも、これも町内の中でも結構聞くことです。

こういうふうを考えていくと、総じてうまく機能しているといっても、実際にはいろんなことがあることを考えると、やはり地域コミュニティは新しい形というのを目指していかないといけないんじゃないかというのが現状の評価で、それから、誕生企画とかいろんなことをやっていくうちに、個別の状況を把握して、個別に対応し

ていくということをもっと大事にしなければいけないんじゃないかというふうに考えています。

先ほど申しましたけれども、従来の福祉の施策というのが、ひとり暮らし高齢者と、それからあと障害者ですね、とにかく手厚かったんですが、実際に例えばひとり暮らしでない高齢者世帯というところを尋ねてみますと、中には、例えば配偶者の方が数年にわたって入院中で、実際にはひとり暮らしなんだけれども、住民票上は1人ではないとかですね、それからあとは、老老介護でおじいさんが一生懸命家事をやっているケースとかいろんなケースがありまして、こういうことを考えていくと、従来のどういう方にはどういう対応というふうな決め事ではなくて、地域の現状というのをきちんと把握し続けること。これは1回やればいいということではなくて、人の状況は常に変わっていきますから、これは量的な問題はありますけれども、継続的にやっていくことが重要ではないかというふうに思っています。これはボランティアでもやってますけれども、とても足りることではありませんので、こういったあたりで連携ができればいいんじゃないかなというふうに思っています。

連携ということではありますと、実際にボランティアが地域の課題を仮に把握しても、すべてボランティアが解決できるわけではありません。先ほど、日南町で保健婦さんとかヘルパーさんが回っておられるという話もありましたけれども、実際にはいろんなところが重層的にコミュニケーションとっていくということが大事なわけで、それを得手不得手をうまく活かして地域づくりをやっていくためには、連携ということではもっとうまくやっていかなければいけないのではないかなと思っています。

地域の状況としては、ただ希望の芽が出

てきているなと思っているところは、まず日常会話の中で自分にできることがあれば何かしたいというようなことがふえているという実感を町内でも持っているということと、それからあとは、高齢者の方で、本当にちょっとしたことで頼まれる方がおられるんですけども、その方が足だけは大丈夫だから、近所の足が悪い方の買い物を最近引き受け始めたと言われて、こういったのもボランティアかなというような声が聞かれ始めたといったこと。それからあとは、毎月の誕生企画に参加している小学生が、感想として、会ったときは元気そうだなと思ったけれども、いろいろ話を聞いているうちに、ひとり暮らしは大変そうだなというふうに思ったとか、そういったような話にも、もしかしたらつき合わされてる面もあるかもしれないんですけども、それでも来月も参加したい、楽しみにしているといったようなことが、今後に大きく希望が持てることではないかなと思っています。

こういった中で今後のまちづくりということを考えると、まず、人の善意というのが、例えば西部地震でお世話になったからそれを何とかしたい、それから、町内でもボランティアに助けもらったから何かお返しをしたいというときに、中元・歳暮みたいに、してくれた人に返すのではなくて、今度は何か自分ができることで、違うところで返していくというようなことで、人の気持ちがうまくつないでいく、それから回っていくというような機能ができるようにしていくことが大事かなと思っています。

地域コミュニティーがうまく機能していくために新たな仕組みづくりをするために、従来からの助け合いということを活かしながら、知らない人に対しても手助けができて、個人的な気兼ねが要らないような

状況ということをつくっていくことが必要かなと思っています。そういう意味で、現状でボランティアセンターが運営を続けているということはすごく価値があることかなと思っています。

2番目に、本当は私もボランティアに成り行きですごく肩入れをしているような格好になっていますが、ボランティアがすべてだとは思っていませんけれども、今の日野のような状況でいくと、町民が生き生き暮らせる、それから生きがいづくりという意味でも、ボランティアというのは一つ大きな手法になるのではないかなというふうに考えています。せっかく自分も何かやりたいという気持ちを持っておられる方がたくさんおられるので、これを具体的な活動に結びつけるために、今、日野ボラネットでは毎月の企画をやっていきますけれども、このほかにも、例えば役場等でボランティア活動の情報を一元化するとか、それから問い合わせ窓口みたいなものをつくるとか、そういったようなことも考えられるかなと思っています。それによって、高齢者もやっぱりやってもらいっ放しはよくないと思いますので、それはむちでたたいて何かやらせるとかそういうことではなくて、本当にちょっとしたことで、自分もできるんだというような気持ちを持ってもらうことが、これは生きがいづくりで、ひいては町が活性化していくことにつながるかなということと、それから、高齢化が進んだ町では、つつい高齢者への支援ということばかりに目が行ってしまいますけど、最近、私がちょっと思っているのは、案外子供に力を入れていくことが町全体を活性化していくキーになるのではないかなということを考えています。

最後に、こういったようなところを通して、高齢者とか障害者が地域で見守られている実感を持てる、そしていざというとき

には助けてもらえる、これはどれぐらい頻度でやってもらえるかということだけではなくて、そういう実感が持てる状態というのをつくっていくことが今後のまちづくりでは大事なのではないかなというふうに考えております。

○片山知事 ありがとうございます。

それでは、室崎先生、コメント、助言、お願いします。

○室崎氏 まだたくさんテーマがあるんですけれども、私なりに3つのシステムと3つのキーワードということで少しまとめてみたいと思うんですね。

3つのシステムというのは、これからのまちづくりなり地域社会でどうシステムが要るのかということなんですね。1番目は、やっぱり地域教育のシステムってすごく大切だと。その中で、特に皆さん、子供のことを言われたんですけど、やっぱり子供をしっかり育てていくということは、かなり根幹だと思うんですね。先ほど虻田町の町長さんと知事さんとの間で、どうしてうまく逃げられたのかという話が少しあったんですけど、私の聞いている話は、随分昔から子供たちに対する火山のいろいろな危険性の話とかをするような講座というか、子供たち集めていろいろ勉強会をずっと続けられた。そこに参加してた子供のうちの2人か3人が虻田町の職員に既になってた。その人たちがすごくそういうことよくわかってというようなこと。だから、結局、わざわざ訓練とか何か特にそういう勉強会しないでも、子供のときにそういう火山の現地教育というのが、何かそういうことを体験したら、子供は子供なりにそういうものはちゃんと身につけていくというようなことだろうと思うんですね。

それはやっぱり地域のコミュニティーの

中でしっかりやっていく。それが先ほどまちづくり何とか養成塾というのを言われてましたよね、日南町さん。こういうのはすごく大切なことだと思うんですね。そういう地域の中でうまくそういう人づくりというか、そういうものをつくっていく。そういうものが地域の中にしっかり根づいているかどうかというのは、昔はそんなことを言わなくても、それはおばあちゃんがちゃんと孫を教えるという仕組みがあったんですけれども、今それが弱ってる中で、もう少しそれを地域ぐるみの中でそういう教育のシステムをどうつくるかってすごく大切だと思います。

それから、2つ目が、これも皆さんが言われた、地域見守りシステムというのが、地域のコミュニティーサポートのシステム。特に、これは高齢化社会の中で、お年寄りだけが住んでいるような地域がどんどんでき上がっていったときに、やっぱりコミュニティーはしっかりしているといっても、担い手はやっぱり変わってきている。昔のコミュニティーはコミュニティーもしっかりしてて、かつ若者とかいろんな人たちがいて、それが支えられたんだけど、今、コミュニティーはしっかりしてて、よくどこにだれがいるかわかってても、やっぱり体力的にとかいろんなところで支え切れない。そこをどうやって地域全体でサポートしていくシステムをつくるかというときに、その中にやっぱり少し民生委員の方だとかボランティアだとか、そういう人の力をうまく組み込んだような、コミュニティーだけというシステムではなくて、やっぱり少し外部的な、そういうサポートの人も入れたような新しいコミュニティーシステムというのをつくりたいといけないし、あるいはそういう住み方も、お年寄りだけがまた助け合って住むような一つの住み方というか家づくりというか、農村部の

人に隣のお年寄りと一緒に住めなんていうのはあれかもしれないけれど、少し共同生活みたいな、お年寄りをうまく支えられるような共同生活のシステムを、やっぱりもう一度見直して作り直すということは必要かなと思っています。

それから3つ目が地域のコミュニケーションのシステムですね。これも矢田町長さんが言われてた情報の話と関係してるんですけど、今の情報のシステムというのは割合上の、一番トップのところの情報システムはどんどん整備していくんですけど、一番足もとの、一人一人の個人のところに行くところのシステム、いやそれは携帯電話だとかウェブサイトとかインターネットでというわけだけど、それを活用することもすごく必要だし、そこに古くからの掲示板とかかわら版みたいなシステムを入れながら、どうやって細やかに、一番個人のところとどうつないでいくようなシステムをうまくつくり上げていくかという、情報システム。多分、日南町の町長さんが言われたのは、その辺がすごく意識された細やかな情報システムをつくらうとされてると思うんですけども。そういう地域の中でちょっと新しいIT技術もうまく組み込んで、地域の人々のコミュニケーション、双方向のいろいろ会話ができていくような、そういうものというものを。だから、その中にひょっとしたらケーブルテレビのシステムもあるかもしれないし、いろんなものを組み合わせた、地域の中の情報システムという、細やかな情報システムをどうつくるかというのは、多分これからの社会はすごく大切だなというふうに、3つのシステムというのはそういうことですね。

あと3つのキーワード、これは簡単にします。これは、私個人の思いです。1つはコミュニティというキーワードですね。これは、僕はいろんな、復興の場合のこ

ともそうだし、まちづくりの場合もそうだけど、結局何が一番大切かといったら、コミュニティというものだと思うんです。さっきの意見を聞くといっても、個人個人の意見を聞いたらみんな違う。だから、コミュニティ全体としてはどういう方向に行こうとしてるのかということをしっかり、我々まちづくりするときはそれを見てあげないといけないと思うんですね。コミュニティはどうなのか。それから、やっぱり復興を考えたときに、コミュニティがきちっとまとまっていけるのか、コミュニティが生き延びていけるのか、常にコミュニティという単位で物事を考えていくという発想がないと、社会づくりも、それからまちづくりも進まないという、実はすごく重要なキーワードだと思います。

2つ目のキーワードは、これは我が事というか、自分のこととしていろんなものができる。この中には、杉山さんからのイベントのいろんな工夫。工夫というのは、やっぱり自分たちの手づくりの中でやってるよという、業者がつくったお弁当でも、真ん中に入って持っていく、何か手づくり感を与えるんです。我が事、自分たちの身近なものとしていろんなものが考えられていけるという、お誕生会のプレゼントもそうだと思うんです。我が事のために創意工夫を活かしていくという、すべてが我が事の問題として考えられるか。それは、かつて言うと、すごく行政依存で、何でも行政がしてくれるんだというようなところを少し変えていって、我が事の問題としていろんなことが考えられるような、そういう一つの仕組みをつくっていけるのかどうかということがすごく大切だというのが、2つ目のキーワードです。

それから3番目は、これはちょっと、皆さんの話には出てきてないキーワードなんです。私はいつも輪中、輪中というのは

長良川が氾濫するときに、村を守るためにみんな堤防をつくるんです。これはなぜそういうことを申し上げたかという、最初の虻田町長さんのお話のときに、砂防堰堤が何かできて、うまく被害が救えたんだということなんですね。防災でハードというのはどういうふうに位置づけるのか。日南町の町長さんは病院が大切だとかいろいろ言われた。ヘリポートが大切。それは全部、僕は輪中だと思うんです。地域社会の共有財産として、地域の運命を守るためのきちとしたハード、最低きちとした施設はやっぱり要るんだと。それは場合によっては道路である場合もありますし、それから場合によってはそういうヘリポートである場合も。そういうものは一体何なのか、その地域にとって一番大切な、その地域を守るものとハードの仕組みというのは何なのか。それをみんなで、輪中といたらみんな管理をするんですね。輪中というのは、ハードとソフトとつなぐ概念ですごくわかりやすい。それをハードだけ考えると、もうあれも要る、これも要る、道路が要る、何が要るとかね。

ちょっと今日は北海道の悪口言うと悪いんですけど、奥尻の地震の後で、あれは何か8メートルかの津波が来たんで、みんな10メートルでうわっと囲んじゃったんですよ。すると、2つ問題が出てくるわけ。今度は堤防依存です。堤防があるから大丈夫だというふうに思い込んでしまう。もう一つは、堤防があるためにウミガメがいなくなって、観光がうまくいなくなるんです。これきわどいんですね、やっぱり。だから、雲仙のやつだって、それは安全だけ優先したらもう離れてしまうからね。すごい泥流を防ぐような巨大な壁をつくって泥流を抑えればいいという話になるけど、それだったら観光がうまく成り立たない。そこで、ある程度生活を守りながら、だけど、

どこかにきちっとハードの仕組みを入れないうまくいかない。そこをどうとらえていくかというので、僕は輪中というか、ハードというものをどういうふうにしてとらえるかという一つ考え方をしっかり持つという意味では、僕は岐阜の長良川の輪中というのはすごくなかなかいい考え方だなと。

ヘリポートも必要だし、病院も必要だし、そういうものはやっぱりつくっていかないと、何か手づくり手づくりということイベントばかりしてても守れないんだというようなこともちょっと申し上げたいと思って、3つのキーワードといたらそういうことです。

以上、まとめになってるかどうかわかりませんが、最後の方は自説を披露しただけかもしれませんが。

○片山知事 ありがとうございます。

パネリストの皆さん、いかがですか。他の方の御意見聞かれたり、室崎先生のコメントを聞かれて、何かもしございましたら、よろしいですか。

それじゃあ、だんだん時間も迫ってきまして、せっかく今日、この会場に多くの皆さん来ていただいていますので、もし会場の皆さん方の中から、これ聞いてみたいとかありましたら、遠慮なく手を挙げてください。

○(来場者)

この鳥取県西部地震では、恥ずかしいことですが、島根県の一部も被災しているながら、島根県のほとんどの住民は対岸の火事という感じで関心を持っている方がほとんどいまして、私はこちらに来ていろんなことをきょう聞きたいなと思って参りました。

たくさんの方の話を勉強させていただいたんですが、初めのときに室崎先生が御指摘

されました、最近の災害というのは非常にダメージが長期的になるし、間接的になる。生活の苦しみを抱えてる、そういうダメージがあるという御指摘がありました。

島根県の場合は、県全体の9割以上、91%が中山間地域ということで、過疎と高齢化が極端に進んでいます。もしそういうところで地震が起きた場合、島根県はほとんどNPOという団体もありませんし、まして、ダメージが長期化する、間接化するという場合、今日のテーマでありますけども、住み続けたいまちづくりということを考えたときに、かなり問題が長期化するんじゃないだろうか。そういうときに一体どうやって対応したらいいのか。きっと、こういう問題というのは、資金面でも、それから人材の面でも、大きな壁を迎えると思うんですけども、今日皆さん、たくさんの方の経験をなさってる方がいらっしゃるの、それぞれの方々に、住み続けたいまちづくりの長期化の問題をどうやって考えていらっしゃるのか、実際にどうやって取り組んでいらっしゃるのか、そんなことを簡単に聞けたらと思います。

それから、申しわけないんですが、片山知事にも。私、鳥取県のことよくわかりませんので、災害直後の対策で、鳥取県というのは非常に注目を浴びましたけれども、この住み続けたいまちづくりの長期化の問題に対して、片山知事の方から、例えばホームランのような対策を用意してらっしゃるとか、そういうことがもしおありになれば聞いてみたいと思うんですが、よろしくお願ひします。

○片山知事 ありがとうございます。

今の、どうしても災害があった場合に避難とか対応が長期化する、現に虻田町などもかなり長期化したわけでありまして、神戸の場合もある意味では長期化しているわ

けですけども、これについて、どなたかございませんでしょうか。

○長崎氏 それじゃあ、地震と噴火との災害の差はあるわけですけども、やはり避難するということについては変わらないと、このように思います。

やはり、私どもの噴火災害というのは、火砕流の発生というのが大変恐れられまして、いわゆる何年か前に九州の島原の普賢岳の問題があったということもございまして、結局長期化する避難ということになったわけです。

それで、先ほど申し上げましたように、町の方のほとんどが洞爺湖観光というのに従事しているというような関係もございまして、3月31日の噴火であったために、雇用先がないわけですね。ちょうど年度がわりだったということもございまして、それで、ただ避難所にいるわけです。いるわけという語弊がありますけども、避難所において、結局何もすることがない。いわゆる危険区域内に全面的に指定されていますから、立ち入ることができない、そういうような状況でして、やはり避難された方々は、そういう意味では大変気の毒だと思ひます。ですから、やはり雇用の問題というのが一番大変だったわけですが、幸い、緊急雇用対策事業というのがあの年度からですか、3カ年の事業としてあったわけですけども、それを道あるいは国の緊急的に相当額を確保していただいて、ほとんどの方々にそういう緊急対策事業に出してもらおうというようなことで働いてもらったということがございます。

ただ、経営者はやはり経済面で大変だった。結局、資金の貸し付けということもなかった状態なものですから、私どもとして、町としまして、噴火後10日ぐらいたちまして、すぐ商工業者と金利の町負担と、有

利な方針を打ち出しまして、その後、道ともかけ合ひまして、道としても何かしてもらおうというようなことを願います。あるいは、それがきっかけとなりまして、道が30億かの枠を設定するというようなこともございました。ただ、やはり市中銀行、あるいは地元の金庫などとの関係では、金庫自体がもう洞爺湖温泉がつぶれるんじゃないだろうか、どうなるんだろうかというようなことで、大変な状態に陥ったということも事実でございます。

そういう面で、とにかく経済的な面ではやはり相当な打撃というのは、周辺含めて。観光が再開されたのが7月の10日でございますけれども、結局、観光客というのは、あの噴火した年は10%内外、修学旅行はゼロというような状態だったということです。それらのしわ寄せが今来ているわけですが、いろいろな面で町も協力していかなくちゃならないと、こんなふうには思っているわけです。

○片山知事 ありがとうございます。

私も、震災の後の復興に当たってますときに、幸いだったのは、余震がかなりありましたけども、一応大きい地震が終わって、後は終息に向かうという、これは地震の専門家の先生の話もありましたので、もう後は余震が終息するだろうということを前提にして、そうしますと、復興に向けて全力、目標を持って全力で当たれるわけですね。これは大変幸せだったと思うんですね。これがずっと長い間、さてどうなるんだろうかということが続きますと、だんだんだんだんもう気力も衰えてきたり、不安が募るし、それから、いろんな意味で見極めが重要になってくると思うんですね。その地域を復興するのか、それとも、放棄とはいいませんけど少し移るのか。それから、被災者の皆さんにしても、なりわい、仕事を、

特に観光業なんかの場合そうだと思いますけど、続けるのか、再開するのか、見極めるのか、この辺が非常に大変だろうなとつくづく思うんですけどもね。今、虻田町長さんからそういうお話が出ました。

それから、私に対して御質問ありましたが、私は地震が起きました直後に現地に行きまして、さっきもちょっとお話ししましたが、やっぱり住宅に対する不安が一番大きいと思ったんです。その住宅に対する不安というのは、結局は地域を去らなければいけないかもしれないという不安だったと思うんですね。ですから、なるべくもとどおりにしてあげることが災害復興の原点だと思って、できる限り、とにかくもとどおりに近い状態にすることを心がけました。おかげさまで、住宅再建というものを一つの柱にして、かなりもとどおりに戻ってます。被災された皆さんの一時的にはなえた心ももとどおりに戻ってます。これは非常によかったと思うんです。

それじゃあ、これからどうするのかということなんですが、ホームランのようなものは特段用意していませんけど、私は、やっぱり今回の地震から得た教訓は、地域社会をどうやってしっかりとしたものにしていくか、守っていくのか。みんな、不安の最大のもと、地域社会から去らなければいけないかもしれないという不安なんですね。ですから、地域社会をしっかりとしたものにしていく、もっと地域にこれまで以上に、行政も一人一人の住民の皆さんも目を向けていく、そういう気風づくりをやっていきたいと思っています。

そのためにはいろんなことがあって、今までは行政はあんまり関心を持たなかった自治会の活動、市町村は別ですけども、県行政なんか余り関心を持たなかったかもしれないけども、もっとこれから関心持たな

きゃいけない。さらには、自治会とか町内会の中でどういふ皆さんの営みが行われているのか、そんなことにも関心持つ。例えば、町内会の活動の中での文化だとか、そんなものなんかも非常に重要な要素になってくるので、そんなことにも目を向けていく。行政もそういうふうにし少し視点を変えなきゃいけないというのは、一つの私にとっての教訓でありました。そんなことをやっていこうと思っております。

ほかにございますか。

どうぞ。

○(来場者)

消防団といたしましても、ああいう地震はいまだかつてない地震ですので、その直後においての我々の対応はどうかということ懸念して、あのときのちょうど1時半には、県の消防協会の会議が弓が浜荘であったわけであり、さらにこの地震の余震がこれだけ続き、もやもやしたような会議なんかはやめて解散せというようなことを私も申したわけであり。杉山さんが言われましたが、避難者の心のケアといいますが、そういうものを、米子市でも地区地区に公民館が26公民館あるわけであり、そこから消防団はそれぞれ15名から20名の消防団がおるわけであり。行政も二、三日してから、消防団の私の方に助役が来まして、何と避難民のお世話をさせていただけんかということでしたが、ああそういうことなら、消防も火災とか水害とか目に見えたものはすぐわかるけれども、私の方は日野川護岸の地区ですので、余り米子市といっても災害がなかったわけであり。直ちに私の判断で分団長会議は後からするという判断で、それぞれの消防団に、地域に派遣したわけであり。私も2回ほどずっと回ってみると、米子市でも7カ所、8カ所の公民館で避難者がおられたわけであり、

ある公民館の館長を私が回ったときに、何と市の職員さんもそれはしかりですけど、疲れてしまっておられるわけであり、消防団では地域の代表ということで、避難者に対する心安い人が、知る人が多いということで、非常に心強く避難者が言われたということ私も報告を受けまして、大変喜んだわけであり。そういうようなときには、行政も遠慮せずに、どれだけの被害があるかということとはなかなかわからんわけであり、この2年ほど前の地震では、そういうことで消防団動員が、いろいろ地域の避難民に対するお世話をしたということは、非常に私もよかったなということですが、きょうは意見として、特に杉山さんがいろいろなことを言われましたが、行政も遠慮せんように、地域の皆さんでそういう人をお世話するということは、非常に避難者が安心して心のケアができたということがあったわけであり、そういうようなことがあったならば出番ですので、消防も。日南町の矢田町長さんも言われましたが、消防団長と回ったということでしたが、もっと活用すべきというふうには私は思っております。以上です。

○片山知事 ありがとうございます。

室崎先生、もし何かコメントがありましたら。

○室崎氏 そうですね、消防団の方は遠慮されずにどんどんやられた方がいいのかもしれない。

消防団ってすばらしいのは、地域密着、地域をよく知っておられます。それから、専門技術を持っておられるし、それから即効、すぐに対応できるという意味でいうと、いろいろな意味での能力を持った組織ですよ。阪神大震災でも、一番たくさんの人を助けたのはどこだったかという、消防団

が一番たくさん人を助けてるんです。そういう意味では、やっぱり非常に貴重な一つの、ボランティアと言ったら怒られてしまいますけれども、そういう専門家集団というか、防災の非常に組織だと思えますので、やっぱり消防団が防災対応の中でどういうふうに働いていただけるのかというのも重要な検討課題ですし、それこそまた鳥取県方式で消防団を軸としたようなひとつ仕組みをつくっていただければありがたいなと思えます。

○**片山知事** 消防団というのも本来は、アメリカ的に言うとボランティアなんですね。行政と住民の皆さんとの接点だろうと思えますけどもね。ありがとうございました。

いよいよ時間も迫りましたが、もしどうしても最後にパネリストの皆さん方、室崎先生含めまして、これだけはちょっと一言ということがありましたら。

杉山さん。

○**杉山氏** 避難所で避難してきた人には救援物資が当たったんです、神戸の場合。でも、家がちょっと傾いても頑張っただけで家にはその避難物資が行かなかったということは、ちょっと反省事項として思っております。頑張っただけで家にはまだそういう救援物資を回すべきだったのではないかなと、そんなことを反省として思っております。

それと、私ちょっと子供の詩を最後に聞いていただきたいなと思って持ってきたんですけれども、震災の年に長田区の小学5年生がつくったものです。

『なくしたもの。地震でなくしたもの、家、道、港、そして人の命。地震が教えてくれたもの、水、ガス、電気のありがたさ。変わらなかったこと、空。朝が来て、夜が来

て、でも外を見ると不思議な気持ち。なくしたものはいっぱいあるけど、教えられたこともたくさんある。人の優しさ、たくましさ。おばあちゃんもお母さんも言った。ものは頑張ればまたできる。みんなで助け合って、みんなで頑張れば、またもとの町に戻る。私はそう思う。』

これ、5年生の女の子の詩なんです。ちょっと心打ちましたので、御紹介させていただきます。以上です。

○**片山知事** ありがとうございます。(拍手)

ほかにございますか。

山下さん。

○**山下氏** 今日の話で、特に外の面ばかりの話をしたんですけども、いわゆるハードの面でいいますと、復興が見かけ上かなり進んできているというのは、これはもう本当に住宅補助金の効果というのはすごく大きくて、すごく感謝されているところで間違いないんですけども、実際問題には、その中でもやはり自己負担がかかっていることがあって、経済的な負担がこれからも続いていくということがあるということと、それから、実情は、高齢者の方なんかで、すきま風が入るようになって冬風邪引いたりするけど、この程度は仕方ないというようなケースというのは本当にざらにありまして、これが復興してるかしてないかというところで言うのはすごく難しいんですけども、そういったことですか、それから、例えば地域の共有施設とか神社とか寺といったものも、共有のものと言ってしまうとそれまでですが、そこを直していくためには結局個人の負担というのが今後も続いていくこととなります。ですので、来場している方も全般に復興しているということで終わったというような見方をするので

はなく、これからも温かい目を向けていただければというふうに思っております。

○**片山知事** ありがとうございました。
室崎先生、何かございますか、最後に。

○**室崎氏** 特にないんですけど、杉山さんの詩との関連で一言だけ。

取り戻せるものってたくさんあるんです、家だとかそういうものは。でも、取り戻せないものっていうのが本当は2つあるんですね。1つは命です。人が亡くなってしまったらおしまいだ。だから、そのことについてはしっかり考えて、二度と命を失わないようにしないとイケない。2つ目がふるさとなんですよ。ふるさととも一度つぶれたら、これはもう取り戻せない。そういう意味で、コミュニティの大切さ、それから、その地域を守るためのいろんな手だてをしっかりとやらないとイケない。やっぱり命とコミュニティというのは取り戻せないということをぜひ御理解いただきたいというふうに思います。

○**片山知事** ありがとうございました。
私も、今最後に杉山さんとか室崎さんが言われたことに本当に共感するんですけども、被災した後に日野町とか西伯町とかひどくやられたところへ行きますと、おじいちゃんおばあちゃんが被災者なんですけども、皆さん本当に不安なんですね。鳥取県の場合には、幸いにして命を失う方はおられません。これは本当にありがたいことでした。もう九死に一生という例はいっぱい随所にあっただんですけども、結果としてはどなたも命は失わなかった。だけど家を失ったとか、その家を失ったことによって地域を失う。それは、自分の生活の拠点であるし、隣近所との人間関係であるし、それから、普段本当に気にもとめない

風景とか、それから通っているお店とか、隣近所のけんか相手もそうかもしれませんが、そういう普通の本当にそんなに気にしない存在というものが、実は失うということになったら実に大変なことなんです。その失うかもしれないという不安に皆さんおののいていたわけです。もうこれ自分の手で直せないからどうしようか。そうすると息子が、お母さん、もう僕のところにいらっしゃいよと言って大阪とか東京の方から誘いをかけてくる。そうするとやっぱりそこに行かざるを得ないかな、でも行きたくないなという心が揺らいでるのが、本当に手にとるように見えるんですね。それがもう不安だったんですね。いかに地域を失う、地域を去らなければいけないということの不安が大きいかということ、私はそのとき痛感をいたしました。

逆に言えば、普段、日常、平時においても、やはり失ったとしたら本当に大変なことになる地域というものをもっと普段から大切にしておかなきゃいけない。これは、私たち一人一人にとってそうだろうと思うんです。それでさっき申し上げましたように、もう少し、行政もそうですし、一人一人の県民の皆さんもそうですけれども、自分たちの生活の拠点である地域というものをもっと関心を持って、もっと関わりを持って、もっと大切にしていこう、こういう今、気風づくりというのをやってるところです。そのためには、高齢者の皆さんということも一つの中心になるし、子供たちということも中心になるし、それから、普段会社とか役所とかに働きに行っている、そういう人たちも実は地域の主役として活躍をもっとしなければいけない。その地域を輝かせるためには、いろんな人の営みがあって、それは手っ取り早いのは、共同でいろんな作業しましょう、一斉清掃しましょうとか、それから資源回収しましょうとか、

防災訓練しましょうとか、運動会しましょうとか、いろいろあるんですけども、そういうこと以外に、例えば文化だとか一緒に行う文化活動、そんなこともこれから大切になってくるんじゃないかなと思っております。

私も鳥取市東町1丁目というところの町内会に属してまして、我が家も副会長を実は仰せつかって、いろんなことを今、近隣の人たちとやってるんですけど、やればやるほど興味は尽きないし、大切さをまた再認識される昨今であります。ぜひ、今日御参加いただいている皆さん方も、今日いろんなことをお聞きになっていただいたと思いますけども、地域社会というものを改めて見つめ直すということも一つきょうのテーマとして認識していただければありがたいと思います。

今日は本当に長時間、パネリストの皆さん、それから基調講演に続いてコメンテーターもしていただきました室崎先生、ありがとうございました。また、会場の皆さんも、このパネルディスカッションに最後までお付き合いをいただきまして、ありがとうございました。お礼を申し上げまして、これで終わらせていただきたいと思っております。ありがとうございます。(拍手)

○司会 ありがとうございました。

それぞれ災害の種類や状況及び地域の特徴などの違いはありますが、皆さんの被災後の新しいまちづくりへの熱意が伝わってくる議論であったと思います。きょうのこの議論を大いに参考にいただき、西部地震の体験や教訓を活かした元気なまちづくりの取り組みをさらに前進させ、「元気いっぱい！鳥取県」の実現に向けて、皆さん頑張りましょう。

会場の皆様、どうぞパネリストの皆さんと片山知事に、いま一度大きな拍手をお願

いいたします。(拍手)

本日は本当にありがとうございました。

鳥 取 県 西 部 地 震 2 周 年 県 民 大 会

パネルディスカッション資料

1. 神戸市「高丸防災福祉コミュニティ」の取組状況…………… 66
2. 日野ボランティアネットワークの取組状況…………… 70

あれあいのまち 高丸

愛

第6号

高丸ふれあいのまちづくり協議会
神戸市垂水区阪上5丁目1-2
電話 (078) 752-7930

大震災での救援活動

副委員長 杉山力子

不気味な音と、大きな揺れで目覚めたあの朝から三月が過ぎ、暖かな春の訪れと共に、神戸の街は力強く復興へと、確実に歩みはじめています。

あの日は、明るくなるのを待ちかねたように、高丸地域福祉センターへ近所の人達約八十名が避難して来られました。

私達は、我が家の片づけを後まわしにして、区役所と連絡をとりながら、早速おにぎりの炊き出し開始、避難所となり、大勢の人で溢れている区役所にも届けました。

翌十八日も朝七時集合で、夕方五時頃まで、一生懸命おにぎりを作り、区役所へ運びました。

二十日になってから、高丸小にも二百人程避難している人がいると聞き、本当に驚きました。学校に行き、ご相談した結果、宿泊ボランティアを、との校長先生のご希望により、二人一組になって一月二十日から二月二十五日まで、毎晩、宿泊当番をしました。婦人会・自治会・老人会・ボーイスカウトの方々など、地域の人達のご協力で続けることが出来ました。底冷えのする講堂での宿泊奉仕は、なかなか大変なボランティア活動でした。暖房のない学校で、避難している人に、少しでも暖かいものをと、救援物資のおもちゃを利用しての雑煮の炊き出しは、避難の方々のみならず、毎夜宿直奉仕の高丸小の先生方にも喜ばれました。

寒さの中をお手伝いいただいた皆様、本当にありがとうございました。

その間福祉センターでは、さいわい断水しなかったものですから、近くの人に水を提供、毎日長蛇の列となりましたが大変喜ばれました。また、垂水区役所へ応援に来られた徳府県の職員の方々の宿泊施設としても利用していただきました。



避難所となっている高丸小講堂で、雑煮のたき出し H7.2.4



高丸小講堂に置かれた救援物資

2001

第7回

高丸ふれあい運動会

と き：平成13年10月27日（土）
10：00～15：00
（雨天中止）
と ころ：高丸小学校 運動場



主催：高丸ふれあいのまちづくり協議会

プログラム

1 開 会

10:00

1 入場 2 あいさつ 3 地区PR 4 宣誓

2 競 技 (A)

(担 当)

- (B S) 1 みんなで体操 全 員
(瑞穂馬場) ② ザルひき 赤・白 各20名
(中 山) ③ バケツリレー 赤・白 各20名
(山 田) ④ ボール送り 赤・白 大人各40名
(坂 川) ⑤ ケツ圧リレー 赤・白 各20名
(消 防 署) 6 防火クイズ 自由参加
(清 雲) ⑦ 一輪荷車競争 来賓と大人 赤・白 各20名

☆ 昼 食

◇ 来賓紹介

(野田大町) ◇ 垂水消防署のハシゴ車登場

はしご車に乗る
(小学低学年・幼稚園)
「遠くが見える」
「明石海峡大橋が見える」



3 競技 (B)

13:00

(担 当)

- (B S) 1 みんなで体操 …………… 全 員
- (防災リーダー) 2 いざノと言うとき …………… 模範演技と体験希望者
- (B S) ③ 蹴って走る …………… 赤・白 各20名
- (高 丸) ④ 玉入れ …………… 赤・白 大人子ども各40名
- (B S) ⑤ つなひき …………… 赤・白 大人子ども各40名
- (婦 人 会) 6 みんなで踊ろう …………… 自由参加
- 7 クリーン作戦 …………… 全参加者
- 会場を美しくしましょう

4 閉 会



日野ボランティア・ネットワーク（ひのほらねつと）の活動

◆「日野ボランティア・ネットワーク」（ひのほらねつと）は、どんな状況で発足したか

0) 高齢者等への「聞き取り調査」から、震災復興を含めてボランティア活動を継続していく必要性を実感

⇒ 町内外のボランティア参加者が、町内の現状を把握。「何とかしなければ！」

1) 全国から駆けつけてくれたボランティア。その精神を町内に根づかせ、広げていくにはどうすればいいか？

⇒ 「全国から受けた恩を返したい」という気持ちがある。「今しかない！」

2) 4月以降の災害ボランティアセンター継続が決まったが、職員が代わり3人→1人体制へ(臨時職員のため)

⇒ 10月設置以降の経験を引き継ぎ、11月～相談しながら課題解決してきたセンター運営を支援せねば！

◆「日野ボランティア・ネットワーク」（ひのほらねつと）の趣旨

震災を契機に育ったボランティア精神を町に根づかせ、住みよい町づくりにかしていこうという、自主的な組織

1) 災害ボランティアセンターの活動を支援していくこと

2) ボランティアのゆるやかな絆(ネットワーク)をつくること

3) 町内にボランティアの輪を広げること

4) 町外のボランティアの人達とのつながりを大切に、情報交換をしていくこと。

◆「日野ボランティア・ネットワーク」(ひのほらねっと)の活動経緯 <2001年>

- 「日野ボランティア・ネットワーク」発足会(4月14日)
- 「元氣を出そうよ ひの星まつり」主催(8月11・12日):日野町根雨地区・黒坂地区
県西部地震復興支援企画として、米子市児童文化センター、佐治天文台ほか多くの協力を得て実施。近隣・帰省・災害ボランティアの再訪など、両会場で200人を超える参加者が星空を楽しんだ。
- 「震災から一年」企画実施(10月)
「ボランティアサロン」開設／「ボランティアへのお便り発行」／「屋根のシート張り実践」
災害ボランティアに来てくれた人たちの縁を大切にすべきと考え、全国の延べ約3,700人に、1年を機にお礼と復興の進み具合を伝え、来町を歓迎する手紙を送った。
- 県西部ボランティア・ネットワーク発足会にバザー出店(10月)
- 「災害ボランティアのあり方を考える懇談会」で活動実態など報告(11月14日):県日野総合事務所主催
郡内4町の関係者による懇談会に出席。後日、役場・社協と町内での意見交換会に出席
- 町内フリーマーケットに出店(11月23日)
- 「餅つきイベント」実施と町内高齢者世帯への配布(12月23日):日野町久住地区・下覆地区
前年災害ボランティアセンターが実施した「餅つき大会」を、浜田ボランティア村(島根県浜田市)、2地区などの協力でひのほらねっとが主催。ついた餅を町内約130世帯に配り届けた。

<2002年>

●「高齢者誕生月プレゼント」企画実施(4月より毎月第2土曜日)

(1)その月に誕生日を迎える70歳以上だけで暮らす高齢者に、手作りのプレゼントにカードを添えて届け、誕生日を祝って元氣付けるとともに近況や困りごとを聞いて問題解決につなげる企画

*カードにボランティアセンターの電話番号を記して連絡しやすく

(2)ボランティアを育成し、ボランティア活動を推進する企画

*町内の小・中学校、高校に毎月参加者募集のチラシを配り、学校完全週5日制による地域活動の場とする

*プレゼント作りは毎月異なる団体に協力してもらい、活動に広がりをもたせる

*毎月の活動状況・結果を知らせる「誕生日お祝いとんとん倶楽部」の発行

※県共同募金会からの配分を受けて実施

●日野病院へ「心のケア」について提言(4月12日)

⇒6月4日より週1回、日野病院に「震災カウンセリングコーナー」開設中

★町内有志団体「アフガンにW杯を届ける会」に有志で協力(5月)

廃品回収実施、募金箱の設置

★「ひの星まつり Part2」に有志で協力(8月)

<その他>

- *ひのぼらねっと定例会:毎月第2土曜日
- *ボランティアセンター連絡会:月1~2回
- *「ひのぼらねっと通信」発行毎月~隔月

●情報の発信・共有、ボランティアのつながり作り

ホームページの運営(随時): HP → <http://www.infosakyu.ne.jp/hinovc/>

●震災後のボランティア活動記録

朝日新聞連載「地震に負けるな ボランティア奮闘記」(2001年10月~週1回)

最新の約10号分 HP → http://mytown.asahi.com/tottori/kikaku_itiran.asp

●行政などへの提言

「3カ年日野町ボランティア活動推進計画」提出(2002年1月)等

●その他

近隣町へのシート張り協力(申し出)

□日野ボランティア・ネットワーク(ひのぼらねっと)事務局

〒689-5131 日野町黒坂1248-2(高齢者自立支援センター内) 日野町ボランティアセンター

TEL&FAX:0859-74-0117, E-mail: hinovnet@infosakyu.ne.jp, ホームページ: <http://www.infosakyu.ne.jp/hinovc/>

高齢者の厳しい生活



「年だけえ、どうなって 年々月々日が始まった調査もたいと思つた。その調査では、過激高齢化が進んでわんごつとらん」。昨日日野町で大地震を経験し

地震に負けるな

ポランティア奮闘記

> 25 <

「年だけえ、どうなってもういごと思つてる」

た高齢者たちの厳しい生活実態が見えてきた。

■ 同町丹場の看護師、川端令子さん(43)は町の中心部から離れた地域に何度も調査に通い、衝撃を受けた。

訪ね歩いて見た高齢者の暮らしは、町中の生活とはかけ離れたものだった。交通の便が悪い地域で買い物や通院をするのもひと苦労。そのうえ各戸は離れており、外出がままならない冬には近所の人と話さない日がある高齢者が数多くいた。

調査現場で知る衝撃

雪が残る中、聞き取り調査で報告されてきたシート張り作業の現場を確認するボランティア日野町門谷で

「地震の怖さが残つていて、ずっと笑顔が出ないと表情を曇らす人。地震はえらかった」と涙を流す人もあった。地震後、すぐに夫を亡くした女性は「せんそくだった主人のせき私が聞かなくて寂しい」と不安を訴えた。ただでさえ将来の不安が付きまとう暮らし。そこに、地震によってさらに大きな重圧が追いかけてきた。

高齢者世帯であるが故のふたんからの困りごとも分かっていた。地震後、防災無線や配布物を通じて役場から様々な情報が流されたが、耳や目が不自由だと聞き取りが難しく、隣人や民生委員に頼れない場合に、住宅再建の補助金申請

ができていない高齢者がいた。大型の廃棄物を収集場所まで運べず、地震以前からずっと気にかけていたケースもあつた。だれに相談していいかわからないまま、世帯の中で解決できない多くのことを抱えて生活していたのだ。

独り暮らし世帯が一段落すると、引き続き70歳以上の夫婦ら高齢者だけの世帯を把握することが町のためし世帯に比べるとあだん目を向けられる機会が少ないが、老々介護など、より困難な生活をしているケースもあることが把握できた。川端さんには、そんな厳しい環境の中で生き抜いてきた高齢者のたくましさや印象に残った。だが、「10年以上看病し

た夫が死んで張り合いがなくなつた。何のために生きていくのか。自分はどう必要とされていないのではなにかと寂しく、だれかの役に立ちたいという思いもある」といった高齢者の話を聞くと、こう思わずにいられた。 「もうと生きがいをもつて生きてもらえないだろうか。これからも話す機会をつくってニーズ

(日野ボランティア・ネットワーク 井上厚史、山下私蔵)

民間の自主的組織発足



日野町災害ボランティアセンターが移転して間もな
ら「震災を契機に育った
い昨年4月14日。運営にか
ボランティア精神を町に根

地域に負けるな

ボランティア奮闘記

>31<

育った精神、住みよむ町びくくつて

町に活動の輪を広げたい

「かせ、住みよむ町への
にいかして」と呼び
かけ、民間による自主的な
組織「日野ボランティア・
ネットワーク」(ひのぼら
ねつり)が発足した。

黒坂地区の町公民館で開
かれた発足会には、町外か
らのボランティアや自然保
護などの分野で活動してい
る団体に所属する町民ら、

「経験のない住民の姿もあっ
た。
会では、まず、設立の趣
旨として、センターの活動
を支援していく」とマボラ
ンティアの趣やかなきずな
をつくることと町内にボラ
ンティアの輪を広げること
を町外ボランティアとのつ
ながりを生かして情報交換
をしていくこと——の4点
が説明された。

務局長安達功さん(49)は
「社協も手いっぱいだが、
このようなネットワークが
できること強い」と抱負を
語った。

「「根のシート張りでも、
土裏運びなど下での作業も
たくさんある。気持ちさえ
あればだれにでも活動はで
きる」「迷惑をかけたくな
い」という意識が強く、弱者
を一層住みよむにしている。
震災を機に人と人が助
け合える町になるといいと
思う」「駆けつけた人たち
が懸命に働いて下さる姿に
打たれた。町にボランティ

高校生から高齢者まで50人
近くが参加した。「震災で
助けてもらったから今度は
自分にも何かできないか」
と加わったボランティア経
験者らも多かった。

「日野ボランティア・
ネットワーク」の発足
会に集まった町内外の
ボランティアらも日野
町黒坂の町公民館で

続いて、地震発生当初か
らの経緯が報告された。運
営が興社協から町社協に移
った11月以降3月まで臨時
職員として勤めた徳山智美
さん(21)が「シート張りの
要請が殺到した年末もボラ
ンティアの熱心な活動に助
けられ、安心して正月を過
えてもらうことができた」
と振り返れば、町社協の事
業もこんな感想を語った。

「アの輪が少しでも広がれば
いい」……。
最後に、「ひのぼらねつ
り」への入会とセンターの
ボランティア登録を受け付
け、発足会を終了した。
それは、組織としてどんな
活動をしていくか、提案の
始まりだった。

(日野ボランティア・ネ
ットワーク 井上厚史、山
下弘彦)

赤飯のプレゼント

日野ボランティア・ネットワーク

誕生月の高齢者25人に

2002.5/2
第9号

鳥取県西部地域のボラ
ンティアが完成した
「日野ボランティア・ネ
ットワーク」(鳥取県・
日野町品坂)が11日、
町内の5月生まれのお
年寄り25人に赤飯并給
当誕生祝いとして届け
た。

町内には、70歳以上の
独り暮らしや2人世帯の
人が合わせて約4500人
いる。施設後も物心両面
で不安が強い高齢者に対
象に贈り物を用意する
際、喜んでもらおうと贈
り物を計画した。4月か
ら始め、2回目の今回
は、ネットワーク会員や
日野高校生ら30余人が12
組に分かれ、手作りの贈
り物カードを添えた赤飯
を各世帯に配布。同時に振
込振替の検印紙や返財

の片付け具合などもおね
ねした。

4、5月で計30人が
誕生祝いの期間を受け
たが、お年寄りは「部
分の誕生日も忘れてい
たのだから……」「子ども
の顔が見られてよかった」と感激。中には、
思いがけないプレゼント
に涙を浮かべる人もい
た。



2002.5.12 山陰中央



赤飯とおかずをバックに詰める日野町高齢生活改善推進協の女性たち

お年寄りに「誕生祝い」

日野の 励ましの赤飯届ける

鳥取県西部地域のボ
ランティアが完成した
「日野ボランティア・ネ
ットワーク」(鳥取県
品坂)は11日、日野町
内5月生まれの高齢者
25人に赤飯並給当誕生
祝いとして届けさせた。

町内には、70歳以上の
独り暮らしや2人世帯の
人が合わせて約4500人
いる。施設後も物心両面
で不安が強い高齢者に対
象に贈り物を用意する
際、喜んでもらおうと贈
り物を計画した。4月か
ら始め、2回目の今回
は、ネットワーク会員や
日野高校生ら30余人が12
組に分かれ、手作りの贈
り物カードを添えた赤飯
を各世帯に配布。同時に振
込振替の検印紙や返財

ぼたもち どうぞ

日野ボランティア・ネットワークのお年寄りに贈る



2002.4.20 日本海

日野ボランティア・ネ
ットワーク(品坂)は、
70歳以上のお年寄りに
お祝いとして誕生月を
迎えるお年寄りに「お
誕生祝い」の赤飯を届
けさせた。

町内には、70歳以上の
独り暮らしや2人世帯の
人が合わせて約4500人
いる。施設後も物心両面
で不安が強い高齢者に対
象に贈り物を用意する
際、喜んでもらおうと贈
り物を計画した。4月か
ら始め、2回目の今回
は、ネットワーク会員や
日野高校生ら30余人が12
組に分かれ、手作りの贈
り物カードを添えた赤飯
を各世帯に配布。同時に振
込振替の検印紙や返財

と手作りのバースデーカ
ードを添えた。

お年寄りのからは「贈り
物に
お年寄りが嬉しいよとの
お年寄りの誕生月を
迎えるお年寄りに「お
誕生祝い」の赤飯を届
けさせた。

町内には、70歳以上の
独り暮らしや2人世帯の
人が合わせて約4500人
いる。施設後も物心両面
で不安が強い高齢者に対
象に贈り物を用意する
際、喜んでもらおうと贈
り物を計画した。4月か
ら始め、2回目の今回
は、ネットワーク会員や
日野高校生ら30余人が12
組に分かれ、手作りの贈
り物カードを添えた赤飯
を各世帯に配布。同時に振
込振替の検印紙や返財

